

井 上 遺 跡

長野県白田町緊急発掘調査報告書

1980

白田町教育委員会

序 文

臼田町教育委員会

教育長 竹内光平

戦後の日本の変容発展は著しく、何彼につけて目まぐるしい変貌を遂げた。30有余年の短い歴史の過程の中で、これほどの大変化が生じたことは、有史以来我国にも外国にもおそらくその例を見ないであろう。制度機構、経済の発展は元より、科学技術教育文化その他万般に亘っての進歩発展は、活目すべきであるが、それとやらはらに、弊害やらひずみも又多い。

道路整備、地域開発、空地工場用地の造成、圃場整備等のため地形変貌、自然環境の破壊変容も著しい。地下に眠る文化遺産は、我々の祖先が、この地に住みついて、何万年かの長大な歴史の唯一無二の所産であり証明である。これらの貴い埋蔵された文化財が、開発近代化の美名のもとに毀損されて行ったことも、惜しむべき事実である。近時漸く、文化財保護行政の侵透と相俟って、一般にその関心が高まって来たことは喜ばしい限りであります。

当町に於ても、幾多の埋蔵地籍並びに予想地域を有する訳ですが、新町発足来、先輩の遺見に依り、一貫して、その保護と温存に努力され来り、幸い最少限に防止して参って居ります。

時たまたま、昭和48年4月、田口土地改良区の工事中、井土地籍から、予想された通り、遺跡並びに土器の一部が発見されました。早速記録保存のため、チームを編成し、緊急発掘に着手、約一ヶ月を要し一応の調査を完了した次第です。この間生憎の厳寒の期にも拘わらず、佐久地区各地の文化財関係団体、研究団体、町内各有志等の労を嫌はぬ作業が凍土の中で行われ、その熱意と研究意欲に胸を打たれた次第です。

自來数年の経過を見ましたが、此の間発掘の中核指導者の興水利雄氏並びに竹内恒氏の急死等、種々の障害に逢著しましたが、今回町文化財調査委員三石延雄氏を中心に佐久考古学会に依って、本報告書が集大成され、刊行の運びとなりました。大変困難且つ苦辛の多かった、貴い労作であります。町にとっても経験のない貴重な学術資料であります。作業にたずさわって下さった方々の、御努力に深甚なる感謝の意を表する次第です。猶発表の機会と、指導便宜を供与して下さいました、県教育委員会、並びに佐久考古学会に対し心より御礼申上ます。

本書が町考古学の発展に甚大なる寄与を与えて下さることは元よりですが、この発行を契機に文化財保護への理解と協力が得られることを念願してやみません。

重ねて本作業に、御苦勞して頂いた関係の皆さんに厚く御礼申し上げ序文と致します。

例 言

1. 本書は、昭和48年12月8日～17日までにわたって発掘調査された、長野県南佐久郡白田町大字三分字井上193番地に所在する井上遺跡の調査報告書である。
2. 本調査は、白田町教育委員会が主体となり、佐久考古学会に依頼し、会長由井茂也を発掘担当者とし、佐久考古学会会員有志と信州大学生、国学院大学生、明治大学生を調査員とし、地元老人クラブ、白田町文化財調査委員、野沢南高郷土史研究会、小諸商業高校生、白田中学生の方々の協力を得て実施した。
3. 本書に挿入した遺構の実測図作成は、調査団のそれぞれの関係者が行なった。遺物の実測図作成は、武藤金、三石延雄、黒岩忠男、白田武正が行ない、トレスを島田恵子が主に担当して行なった。尚、石器実測、トレスは林 幸彦が行なった。
4. 本書に掲載した遺構の写真は、個人がそれぞれ撮影したものを使用した。尚出土物は、林幸彦が撮影したものを使用した。
5. 本書の執筆は、発掘および整理担当者が行ない、文末にそれぞれ文責を記した。
6. 本書の編集は、島田恵子、白田武正、三石延雄が行ない、由井茂也がこれを校閲、監修した。
7. 本遺跡の資料は、白田町教育委員会の責任下に保管されている。

また、報告書作成に関し、長野県教育委員会、関 孝一指導主事、ならびに白田町議会議員三石国正、青沼小学校長、高畑 豊、教頭、依田宏太郎、事務職員および地元の方々には適切な御指導、御援助を賜わり厚く御礼を申し上げる。

なお、本調査の副団長として献身的な御援助を賜わった地元の興水利雄氏が昭和49年8月9日に、また、本遺跡発見時の調査に御尽力を賜わった竹内 恒氏が昭和50年1月25日に、逝去された。両氏の業績を偲ぶとともに、改めて御冥福をお祈り申し上げたい。

凡 例

1. 各遺構の略号は次の通りである。

住居址——H 土壇——D 溝状遺構——M

2. 住居址実測図の縮尺は $\frac{1}{50}$ 、土壇、カマド実測図の縮尺は $\frac{1}{20}$ である。ただし、H 1号住居址に関してのみ $\frac{1}{100}$ とした。

3. 土器、石器実測図、土器拓影の縮尺は $\frac{1}{2}$ である。

4. 各遺構断面図の水糸レベルは、住居址断面図が716.3m、カマド断面図716.4m、土壇及溝状遺構断面図は716.5mである。

5. 図版中遺物の縮尺は、土器、石器等すべて約 $\frac{1}{2}$ であり、土器、石器番号等を簡略した。例えば第10図1は10-1と表わす。

6. 各住居址出土土器一覧表の法量は、上段より口径、器高、底径の順に記し、()内の数値は推測値、一線は不明、計測値はcmで表示した。

本文目次

序文	
例言	
凡例	
本文目次	
付表目次	
挿図目次	
図版目次	
I 発掘調査の経緯	1
1 調査に至る動機	1
2 発掘調査の概要	2
3 発掘調査日誌	3
II 遺跡の環境	4
1 井上遺跡附近の自然環境（地形地質の概況）	4
2 歴史環境	5
1) 周辺遺跡	5
2) 遺跡周辺の歴史	7
III 層序	9
IV 遺構と遺物	10
1 住居址	10
1) H 1号住居址	10
2) H 2号住居址	12
3) H 3号住居址	15
4) H 4号住居址	21
2 土壇及び溝状遺構	25
1) D 1号土壇	25
2) D 2号土壇	26
3) D 3号土壇	26

4) D 4号土坑	28
5) M 1号溝状遺構	30
V 遺構外の遺物	31
1 縄文時代の遺物	31
ア 土器	31
イ 石器	34
2 弥生時代の遺物	36
3 奈良時代以降の遺物	40
VI 総括	40

付 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	7
第2表 H 1号住居址出土土器一覧表	11
第3表 H 2号	14
第4表 H 3号	20
第5表 H 4号	25
第6表 D 4号土坑出土土器一覧表	30
第7表 M 1号溝状遺構出土土器一覧表	30
第8表 弥生時代出土土器一覧表	39
第9表 井上遺跡検出住居址一覧表	41

挿 図 目 次

第1図 井上遺跡位置及び発掘区設定図	1
第2図 井上遺跡周辺の地質図	4
第3図 周辺遺跡分布図	6
第4図 井上遺跡層序模式図	9

第5図	H1号住居址実測図	10
第6図	H1号住居址出土遺物実測図	11
第7図	H2号住居址実測図	12
第8図	H2号住居址出土遺物実測図	13
第9図	H3号住居址実測図	16
第10図	H3号住居址カマド実測図	17
第11図	H3号住居址炭化材分布図	18
第12図	H3号住居址出土遺物実測図(その1)	19
第13図	H3号住居址出土遺物実測図(その2)	20
第14図	H4号住居址実測図	21
第15図	H4号住居址カマド実測図	22
第16図	H4号住居址覆土内礫群実測図	23
第17図	H4号住居址出土遺物実測図(その1)	24
第18図	H4号住居址出土遺物実測図(その2)	25
第19図	D1号土城実測図	26
第20図	D2号土城実測図	27
第21図	D3号土城実測図	28
第22図	D4号土城実測図	29
第23図	D4号土城出土遺物実測図	29
第24図	M1号溝状遺構実測図	30
第25図	M1号溝状遺構出土遺物実測図	30
第26図	縄文前期初頭の土器拓影	32
第27図	縄文前期初頭および後期初頭の土器拓影	33
第28図	縄文時代の石器実測図	35
第29図	弥生時代の土器拓影	37
第30図	◇	38
第31図	弥生時代の土器実測図	38
第32図	井上遺跡遺構全体図	44

図 版 目 次

- 2 北方に浅間山を望む遺跡の立地
- 図版二 1 H 1 号住居址の出土遺物及土器、炭化材の出土状況
- 図版三 1 H 2 号住居址の出土遺物
- 図版四 1 H 2 号住居址
2 H 3 号住居址炭化材の出土状況
- 図版五 1 H 3 号住居址の出土遺物
- 図版六 1 H 3 号住居址の出土遺物
2 H 3 号住居址カマド
- 図版七 1 H 4 号住居址の出土遺物
- 図版八 1 H 4 号住居址の出土遺物
2 H 4 号住居址
- 図版九 1 H 4 号住居址カマド
2 M 1 号溝状遺構
- 図版十 1 D 2 号土坑
2 D 3 号土坑
3 D 4 号土坑
4 D 4 号土坑の出土遺物
- 図版十一 1 縄文前期初頭・後期初頭の土器
- 図版十二 1 弥生時代の土器
2 石器
- 図版十三 1 井上遺跡発掘調査スナップ
- 図版十四 2 井上遺跡発掘調査スナップ

I 発掘調査の経緯

1 調査に至る動機

昭和48年度白田町園場整備工事が開始され、工事中の4月18日、地元の小林秀人君（小諸商業高校生）により住居址の断面露出が発見され、通報を受けた佐久考古学会員、奥水利雄、武藤金、渡辺重義等の調査に依り遺跡であることが確認された。

5月1日～3日にかけて、佐久考古学会員、竹内 恒、三石延雄、町文化財調査委員清水忠二、教育委員高橋 武氏等が精査したところ、住居址一軒、伴う和泉式土師器3ヶ他土師器片が発見



第1図 井上遺跡位置及び発掘区設定図（1：10,000&1：3,000）

され、付近一帯に埋蔵文化財包蔵地が存在することが判明された。町教育委員会は、遺跡発見届を国へ提出するとともに、文化財保護を善処すべき記録保存の計画を立て、調査を佐久考古学会に依頼して、12月7日～20日にわたって発掘調査を実施した。

2 調査の概要

- 遺跡名 井上遺跡
- 所在地 長野県南佐久郡白田町大字三分字井上193番地
- 発掘期間 昭和48年12月7日～20日
- 調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

〈第1次〉

竹内 光平
桜井 正実
井出 節夫

〈第2次〉

竹内 光平
桜井 正実
丸山 正俊

白田町教育委員会教育長
＊ 教育次長
白田町社会教育係長

- 調査団の構成は下記の通りである。

〈第1次〉

団 長 由井茂也（会長）
副 団 長 奥水利雄（副会長）
主 任 土屋長久
調 査 員 竹内恒、武藤金、三石延雄、白倉盛男、由井明、吉沢忠重、黒岩忠男、井出正義、佐藤敏、藤沢平治、新津開三、新村薫、白田武正（信州大学生）、高村博文（信州大学生）、林幸彦（国学院大学生）、川島雅人（国学院大学生）
青木幸男（明治大学生）
調査協力 小林秀人（小諸商業高校生）、清水忠二、篠原太郎、高柳均、高橋武、高柳哲三、中条武吉、菊地延、横山のぶえ、野沢南高郷土史研究会、白田中学生

〈第2次〉

団 長 由井茂也（会長）
主 任 三石延雄
調 査 員 武藤金、白倉盛男、黒岩忠男、島田恵子、白田武正、林幸彦、高村博文
協 力 者 清水忠二

3 発掘調査日誌

○12月7日(金) はれ

調査団を結成し打合せ会(白田公民館)

○12月8日(土) はれ

グリッド設定、発掘作業を開始する。北より南へA-L西-東1-11(3m×3m)

132グリッドを設定する。I-1、I-3、I-4グリッドより掘込みをはじめめる。

○12月9日(日) はれ

昨日に引続きグリッドの掘下げにより遺構の検出作業を行なう。I-1グリッドに落込を確認する。I-2、I-3と掘下げ、更に周辺グリッドを拡張し、住居址の検出を行う。

○12月10日(月) はれ

I-1、H-1グリッドの西に遺構が延びているのを確認。西側にO-1のグリッドを拡張設定し、I-0、H-0を掘下げ住居址のプラン確認をする。H2号住居址と命名。

○12月11日(火) はれ

H2号住居址の掘下げ作業を行なう。

H-7、G-8、G-9グリッド内に溝状の遺構を検出する。F-9、D-10に遺構を検出。またA-1、A-3に遺構を検出する。

○12月12日(水) はれ

C-9、C-11、D-9、D-11内に住居址を確認する。H3号住居址と命名し、引続いて掘り下げを行なう。H2号住居址の実測。

B-1、B-4、C-1、C-4内に住居址を確認。H4号住居址と命名し、掘下げに移る。D-5内に土壌を確認、D1号と命名。

○12月13日(木) はれ

○H3号住居址掘下げ作業を続行する。床面近くより多量の炭化材が存在しており清掃を行なう。H4号住居址覆土内より礫群を検出。

○12月14日(金) はれ

H3号住居址の実測を行なう。H4号住居址礫群の掘下げ続行。D1号土壌の掘下げを開始する。D2、D3、D4号土壌を確認。

○12月15日(土) くもり

H4号住居址の礫群実測。後、礫群を除き床面まで掘下げる。D2号土壌も掘下げる。

○12月16日(日) はれ

溝状遺構の掘下げを行う。H3号住居址の清掃を行い写真撮影。残りのグリッド掘下げ。

○12月17日(月) はれ

溝状遺構の掘下げ続行。H3号住居址の炭化材、カマドの実測を行なう。

○12月18日(火) 快晴

H3号住居址のカマド写真撮影。遺跡全面清掃および遺跡全体図の実測を行なう。溝状遺構の実測。

○12月19日(水) くもり

D2、3、4土壌の実測。遺跡全面清掃。

○12月20日(木) はれ

遺構清掃、全体写真。テント、機材撤去。

○S54年8月17日～9月1日。遺物洗い及遺物復原作業。

○9月4日～10月20日。遺物実測及図面整理、トレス、拓本、図版、付表、挿図作成。

○10月20日～11月20日。原稿執筆、総編集。

II 遺跡の環境

I 井上遺跡付近の自然環境（地形地質の概況）

佐久平は、東は関東山地の最西北端部にあたる佐久山塊に限られ、西は八ヶ岳、立科火山に、北は浅間火山の噴出物にさえぎられた、北に底辺を持ち、白田町附近を頂点とするほぼ逆三角形の標高700m内外の高原である。その中央を甲武信ヶ岳に発源する千曲川が北流し、佐久平で右岸に入沢川、雨川、内山川、志賀川、左岸から片貝川が各支流として合流している。

佐久山塊は、古生層、中生層を基盤とし、その上部に一部分第三紀層が分布し、北部では、第三紀の古い荒船火山の噴出物に被われている。西側八ヶ岳・立科火山の噴出物は、南部では千曲川流路附近まで、北部では佐久平周辺に段丘を作っている。千曲川断層に沿って北流していた千曲川は、荒船火山噴火最盛時と立科火山の基盤活動の際には、千曲川をせきとめ渾水し大規模の淡水湖を少くも二回は形成している。佐久平周辺の洪積層はその初期の残がいであり、中央部の沖積層はその後期の堆積物である。

当井上遺跡付近の地層は、前記淡水堆積の沖積層分布地域であり、主として砂層、粘土層、砂礫層によって形成されている。以前三分地区で深井戸を掘った際、粘土層の下から流木片や草木の堆積物が出土し、筆者に示されたこともある。恐らく一時渾水時代の静的堆積物であろう。勝



第2図 井上遺跡周辺の地質図（1：50,000）

間南部で戦時中探掘した泥炭もこれと同じ成生のものであろう。

(白倉 盛男)

2 歴史環境

1) 周辺遺跡

井上遺跡は、千曲川氾濫源の沖積地の段丘上に乗って居り、千曲川に流入する谷川と雨川との中間地に存在する。この、井上遺跡を中心とする周辺を見たとき、縄文期・弥生期・古墳時代を通じ、その幾多の遺跡群が点在している。

縄文期に属する遺跡は、千曲川東の月夜平遺跡これは昭和32年の調査により諸磯A式・加曾利E式・B式・堀之内式・土偶・滑車形耳飾等を検し、金石遺跡は昭和29年改田事業のため発見、調査により加曾利E式・勝坂式・炉趾1基等を検出する。又千曲西では、美里在家遺跡で加曾利E式、白田寺久保遺跡は勝坂式、城下遺跡から加曾利E式、稲荷山下遺跡から堀之内式、丸山遺跡は加曾利E式・B式、横山遺跡は昭和29年度の改田の際加曾利E式、家浦遺跡は加曾利E式・B式を、上滝遺跡では改田事業の際田戸下層式・茅山式・有尾式・加曾利E式を、梨久保遺跡は昭和21年に改田事業の際上原式・下島式・炉趾1基を検出、広沢遺跡も昭和21年改田事業の際勝坂式、城影遺跡では有尾式・勝坂式・加曾利E式等数多くの資料を検出している。

弥生期の遺跡は、月夜平・薬種田・三分寺久保・田中・明法寺・片貝川沿岸地域の広沢・栗ノ木・横山・勝間・丸山・下ノ城等の各遺跡から箱濠式を、美里在家遺跡からは中期の栗林式をそれぞれ検出している。尚栗ノ木遺跡からは土製紡錘車を、法印塚遺跡から太形鉛刃石斧の検出もしている。

古墳時代、いわゆる土師器をもつ時期になると一層この地域には集落地帯としての利用が集中的に行なわれたと考えられる。それは、田口・入沢地域の群集墳の出現である。

井上遺跡に隣接する入沢古墳群は、千曲川水系に於ける古墳分布の南限であり、古墳最終末期の群集墳にして考古学上重要な遺跡である。この古墳群の古墳分布範囲を見ると、大字入沢字山際・大深・稲荷大門・遠見場・北権現通り・中権現通り・五雲西・湯殿入口・天神平・宮林・一万窟・西ノ窟・月夜平・三界塚と千曲川東岸山麓地帯実に13の小字に渡り広く分布している。古墳の数は30数基を数えたが、開発その他のため現在ではその大半の19基が燻滅し、又破壊され古墳の痕跡を残しているもの13基、完形墳は1基もない状態である。唯、西ノ窟にある第6号墳が半壊ではあるが町指定を受け保護されている。

井上遺跡の北雨川沿岸地域には昔、俗称十二塚・四十八塚等の群集墳が点在していたそうであるが、これも開発等によりその大半は燻滅し又破壊されたが今尚若干の古墳の残骸が残っている。

それは、幸ノ神古墳群半壊であるが4基内3号墳が町指定、外九間古墳群3基とも半壊、内3

丹墳が町指定、中原古墳群2基半境内1号墳町指定、割塚古墳群2基半壊、又英田地畑古墳は壊滅してしまったが、昭和40年清掃調査の結果、鉄手刀1・直刀1・鉄鎌・銅製品破片・三輪玉・



第3図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

土器（土師・須恵）等を検出している。尚英田地畑を中心に新海神社東御陵・中ノ御陵等の古墳が半壊ながら存在しているが、この辺一帯にも或る数の古墳が存在したと思われる。

以上、井上遺跡周辺の遺跡について概観したが、非常に豊富な遺跡と資料にもかかわらず、正式調査をしたのは、月夜平遺跡・金石遺跡・芦内岩陰遺跡と本調査の井上遺跡のみである。したがって、当地域の遺跡については、大部分が明らかでない現状である。これは何としても正式調査が及んでいないことに理由が求められると思われる。

今後の課題として、縄文期に於ける集落・弥生期の稲作と集落・古墳時代の集落と古墳等々解明しなければならない数々の問題・又遺跡の保護・保存等の問題が有ることを提起できればと思う。

（黒岩 忠男）

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	縄	弥	古	古墳	備考	番号	遺跡名	縄	弥	古	古墳	備考
1	井上遺跡	○	○	○		74	21	小山崎遺跡	○				15
2	月夜平遺跡	○	○	○		72	22	横山遺跡	○	○			16
3	金石遺跡	○	○			43	23	勝間遺跡		○			13
4	田中遺跡		○			108	24	勝間原遺跡	○				11
5	戸井口遺跡	○		○		46	25	丸山遺跡	○	○	○		14
6	三分寺久保遺跡	○	○			47	26	稲前山下遺跡	○				12
7	小山沢遺跡	○				48	27	城下遺跡	○				10
8	藤原田遺跡		○			115	28	反田遺跡	○				8
9	六角堂遺跡	○				33	29	下ノ城遺跡	○	○			7
10	五雲西遺跡			○			30	美里在家遺跡	○	○	○		9
11	五層遺跡	○	○	○		52	31	法印塚遺跡	○				5
12	新塚遺跡	○				53	32	原田遺跡			○		8888
13	上中込原遺跡			○		48	33	蛇塚遺跡		○			3
14	明法寺遺跡		○			49	34	入沢古墳群				○	73~105
15	城影遺跡	○		○		27	35	寺ノ神古墳群				○	58~61
16	広沢遺跡	○	○			26	36	外九間古墳群				○	62~64
17	栗ノ木遺跡	○	○			19	37	中原古墳群				○	65~66
18	日影遺跡	○	○			22	38	蛇塚古墳			○		4
19	家浦遺跡	○	○			18	39	法印塚古墳				○	6
20	上前田遺跡			○		20	40	別塚古墳群				○	54~56

備考は番登録番号

2) 遺跡周辺の歴史

このたび発掘調査が行なわれました井上遺跡は、縄文前期から中世にまで及ぶ、大変巾の広い時代の遺物が出土しました。そこで、遺跡周辺の歴史を伝承を中心に述べてみます。

何万年か昔は、この周辺は海底だったが、地殻の変動により隆起して海面上へ現われたのだそ

うであります。

その後、歴史時代中世には千曲川は、この井上遺跡の地と下越本郷の長慶寺との間を流れており、これは、古地図に残っています。それに共なって、千曲川の淵かと考えられるサスバが池の伝説があります。

井上遺跡周辺から長慶寺、旧青沼村一帯にかけて底知れぬ深さのサスバが池という深い沼があり、都からの流人で高貴な婦人がこの池へ投身したという伝説であります。その供養のためといわれる五輪塔が三分岩崎観音登り口の傍の岩に隔刻されています。この五輪塔は手法から見て室町時代中期以前のものとされています。

その伝説のサスバが池の東岸にこの井上遺跡は位置するのであります。高燥の地であり、西側の崖下は伝説のサスバが池があったといわれる地であり、清冽な水が今も滾々と湧き出ています。

現在の長慶寺は、以前この遺跡の東方約三百米位の小山沢にありました。南方一軒位の所には平林千手院や国の重要文化財である十日町の六地藏寺があります。昔弘法大師が唐から帰って、八ヶ岳へ寺を建てようと調査したが、谷が一つ足りないので断念して高野山へ建立したという伝説があり、この地にも佐久町と同じ名前の高野町という地名が残っています。そのことと関係があるかないのか、八ヶ岳の山中に大きな寺がありました。その寺が高野町の寺久保（佐久西小学校西南二三百米位の所）へ移転し、後、分散しました。その寺の一つ長慶坊が現在の長慶寺であり、又、その時観音様が飛んで来たとか、月夜平の伝説等があり、月夜平からは沢山の出土品もあります。

尚、長慶寺、千手院、弥勒寺、北佐久郡立科町の津金寺等は、承和年間慈覚大師の草創とも伝えられています。

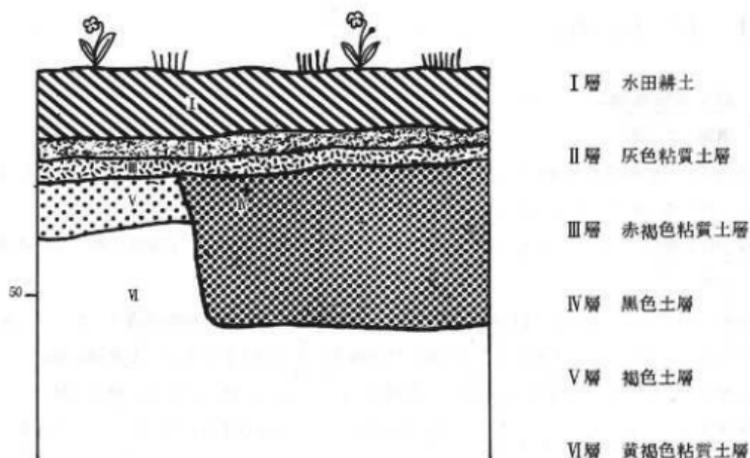
坂上田村麻呂や日本武尊もこの地を通過されたといわれますし、伝教大師が弘仁六年関東巡錫の時、立科の大河原峠から田口峠を越えて行ったということは、一志博士が詳しく論証されている所であります。新海神社の神様興波岐ノ命もその昔同じ立科山を越えて来られ、佐久を開拓されたのだらうと考えられています。

その後、源頼朝が浅間の狩からこちらへ来たとか、最明寺時頼が来たという伝説は、謡曲鉢ノ木の伝えるところで、平井の最明寺、清川の最明院等が世に知られています。又、武田信玄がこの地から佐久地方を席卷したことは新しいことで広く誰にも知られているところであります。

そんな佐久平の南方の略中心地であり、高燥の地で耕作地であり、清冽な水に恵まれ、水害、山崩れ等の心配もなく、そうして八ヶ岳、浅間山等の雄姿を仰ぎ、護られている、井上遺跡とはそんなところであります。その井上遺跡が今回、新進気鋭の研究者達によって発掘調査され、貴重な報告がなされることになったのであります。

(清水 忠二)

Ⅲ 層 序



第4図 井上遺跡層序模式図

井上遺跡は、千曲川によって形成された、段丘上に立地し、段丘の比高は約3mである。

第I層は、水田耕作土で、第II層は灰色を呈し粘質である。第III層は、赤褐色を呈し、いわゆる水田の床土を形成している。

第IV層は、竪穴住居址などの遺構落込み内にみられるもので、黒色を呈し、炭化物、遺物等を多量に包含する。別称覆土とも呼ぶ。遺構の掘り込みは、本来、第V層中もしくは直上からであろうが、第VI層に至って確認されることが多い。

第V層は、褐色を呈し、特に、縄文時代の遺物を包含する。部分的に集中し、遺跡全体にみられるものではない。

第VI層は、粘質性の強い黄褐色土層で、いわゆる地山である。遺物は包含されない。

(白田 武正)

IV 遺構と遺物

1 住居址

1) H1号住居址

遺構 (第5図)

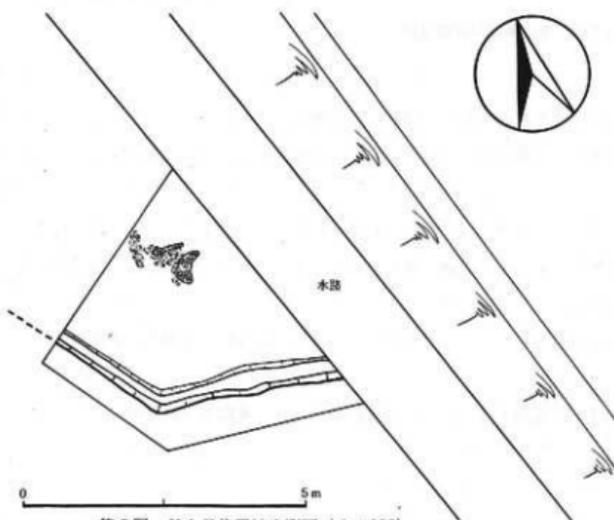
本遺構は、昭和47年度圃場整備工事と、48年度工事との境界に位置し、東側に南から北に流れる用水路が作られた。本住居址は用水路脇の農道予定地に位置していた。

住居址の東側は、用水路構築の際に破壊されており、さらに北側は、47年度工事に依り破壊されていた。

南側と西側の一部に、高さ約30cmの壁が残り、幅約15cm、深さ約7cmの周溝が、およそ5mにわたり認められた。また、本住居址は火災に依り焼失したものとおもわれ、北東側破壊面近くに住居材と考えられる炭化材が認められ、炭化材の近くには赤色に焼けた粘土の塊が見られた。

本住居址は工事に依り破壊されており、全体の約4分の1程度が残存していたのみであり、

柱跡、柱穴等は発見できなかった。



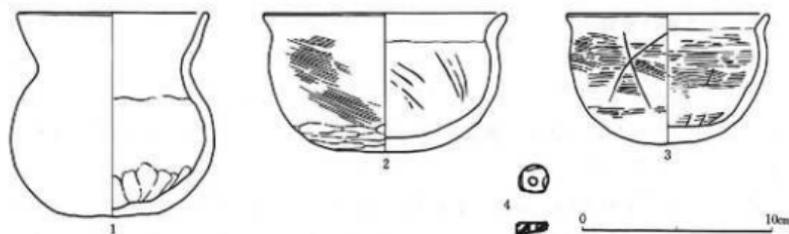
第5図 H1号住居址実測図(1:100)

遺物 (第6図)

1~4)

本遺構の出土遺物は、土師器であり、埴形土器1点、坏形土器2点、滑石製白玉1点、其の他破片である。

埴形土器は、北側の破壊された断面に出土し、坏形土器2点は、炭化材近くよ



第6図 H1号住居址出土遺物実測図(1:3、ただし4は1:1)

第2表 H1号住居址出土土器一覧表

検出 番号	器種	部位	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備 考
1	埴		10.2 10.8 5.0	底部小、丸味をもって立上る 口辺部くの字状に外反す。 口辺部が広い。 最大径胴部中央。	全体横なで。 底部指で押えてなでである。 調整良好。	口辺部横なで。 胴部指で押えてなでである。	色黒茶褐色。 胎土良好、成形も良。
2	埴		13.0 7.4 4.9	底部より丸味をもって立上る 口辺部ゆるく外反 最大径 口辺部。	横なで、刷目の痕ある。 底部荒削り。 調整良好。	横なで、胴部荒い横削りの痕痕ある。 底部に指の圧痕。	色黒、灰褐色。 一部にすずの布着部の黒 死。
3	埴		10.8 6.9	丸底を呈す。 最大径、口辺部。	横なで、胴部に刷目の痕 あり。 底部荒削り。	口辺部横なで。 胴部、荒い刷目、後でな で。 底部なで。	色黒、赤褐色。 外面にすず布着。 ×印へう記号。

り二つ並んだ状態で出土した。白玉もこの付近より見出され、これらの遺物はすべて床面直上より出土した。

本住居址の出土遺物は、それぞれの特徴から見て、和泉期に比定されるとおもわれる

まとめ

本遺構は、昭和48年5月農繁期に入り、臨時の農道が必要となり、露出した遺構が破壊されるおそれがあったため、本調査に先だって行なわれた。

緊急の調査であったため不備の点が多く、又、残存部が少いわりには出土遺物が多く、覆土には炭の小片が多量に含まれていた。赤く焼けた粘土の塊は、こねて何かに使用した残存ではなかろうかと思われる。なにに使用されたかは不明である。なお、3の埴形土器の×印は、なんらかを意味する記号であると考えられる。

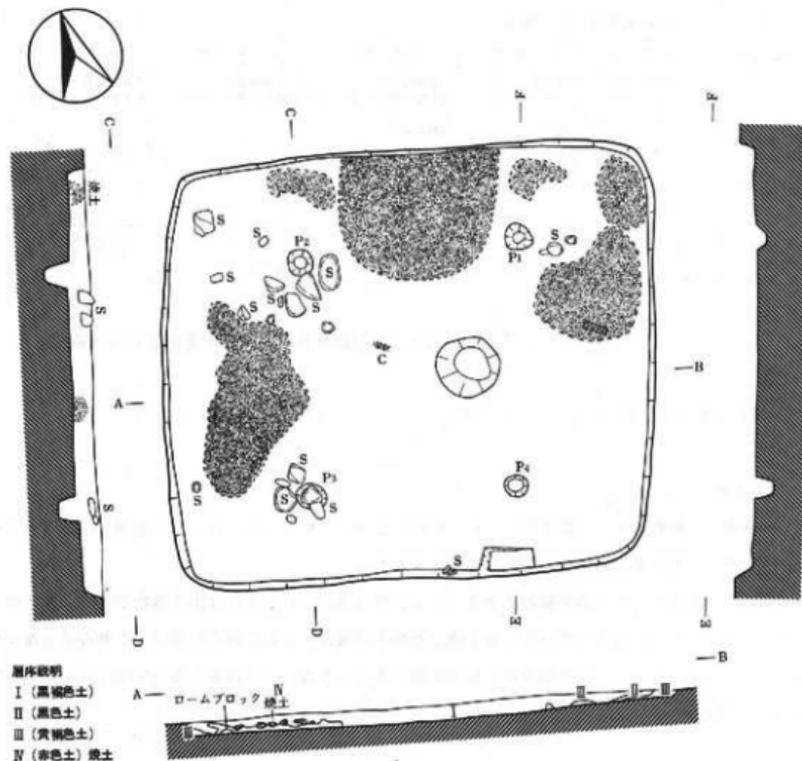
(三石 延雄)

2) H2号住居址

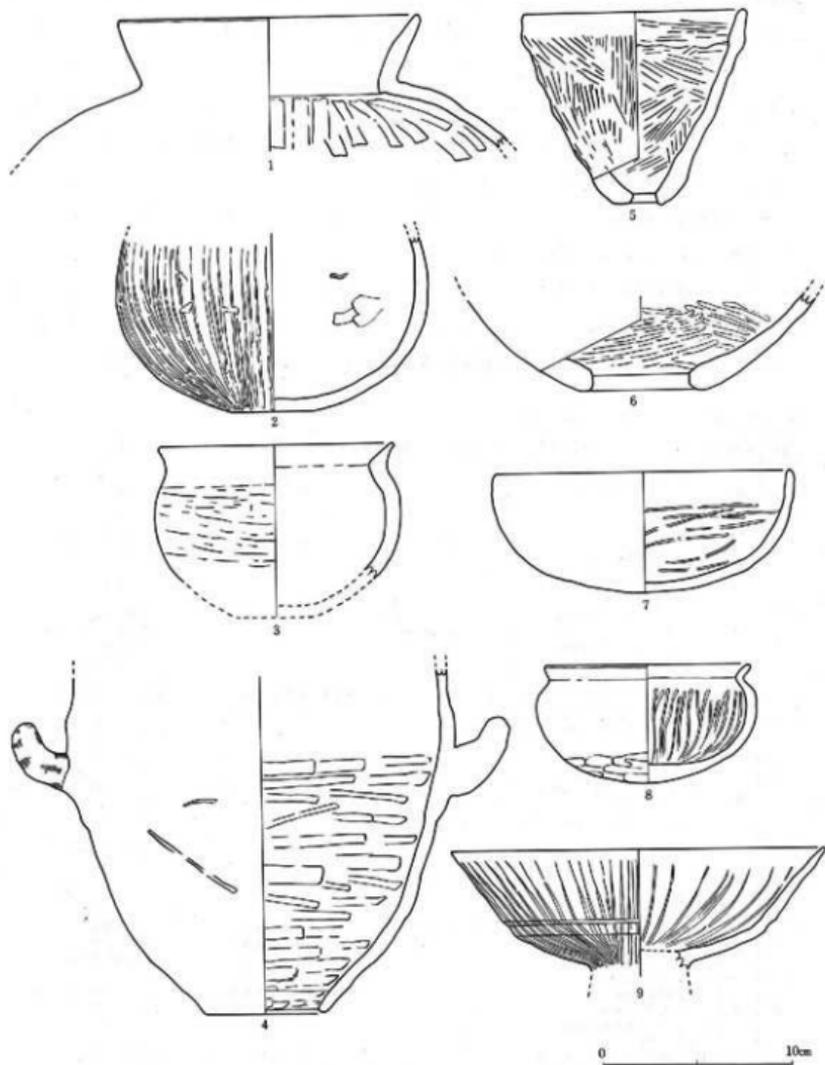
遺構 (第7図)

本住居址は、G・H・I-0・1・2・3グリッド内において検出された。平面プランは、北壁480cm、南壁480cm、東壁420cm、西壁は440cmを測る南北壁が長辺となる方形を呈す。主軸方位はN-18°-Eを示す。

覆土は4層により形成されている。第I層は黒褐色を呈し上面よりほぼ床面全体に及んでいる。この層の上面には多数の礫が認められた。この礫の散布範囲は、本住居址の西側部と西壁より西方1mの住居地外にも多数みられた。いづれも住居址床面より約20cm程上位にあり、住居址内外の礫とも同レベルにある。河原石と割石がほぼ半々である。これらの礫は本住居址の覆土堆積状態等より本住居址廃絶後の所産とおもわれるが、明確なプランは把握されず性格も不明である。



第7図 H2号住居址実測図(1:60) 0 2m



第8图 H2号住居址出土遗物实测图(1:3)

第Ⅱ層は、黒色を呈し住居址の東側壁寄りに堆積している。第Ⅲ層も壁寄りに認められるが、ほぼ住居址を全周する。黄褐色を呈す。第Ⅳ層は焼土層であり、住居址の西側 (P₂とP₄より西側) とPの北側及び東側に分布している。層内には多数の炭化材が遺存している。

壁はしっかりしており、西壁の南寄りには比較的緩やかに立ち上っているが、他は急傾斜をもって立ち上がる。壁高は確認面より平均20cmを測る。東壁のみは低く10cmを測る。床面は平坦となっているが、東側と北側が他所より約5cmほど高い。

カマドは北壁のほぼ中央に位置しており、砂質粘土によって構築されていたとおもわれる。すでに崩壊しており、全体に南側に流出している。

ピットは5個検出された。P₁は長径30cm、短径26cm、深さ10cmを測る。P₂は長径70cm、短径60cm、深さ10cm、P₃は径30cmの円径を呈し、深さは25cmを測る。P₄は長径34cm、短径28cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。P₅は径22cmの円形を呈し、深さは20cmを測る。P₁・P₂・P₄・P₅は、そ

第3表 H2号住居址出土土器一覧表

器種 器名	器種	部位	法量	器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
1	甕	口 上	16.0 — —	口辺部、くの字状に外反。 最大径は胴部にあると思われる。	全体、右より横なで。	口辺部、横なで。 胴部、底い彫り。	色調、茶褐色。 カマド焼土内。
2	甕	胴 底	— — 4.5	平底を呈す。 全体の形は不明。 最大径は胴部と思われる。	腹上から磨き。 所々に凹凸部。	横なで、表面化粧粘土。 所々に凹凸部。	色調、内面赤褐色。外茶褐色。一部に黒泥。 粘土質。 Ⅱ区床直上。
3	甕	口 上	(12.5) 3.2 4.0	平底、丸味をもって立ち上る 口辺部くの字状に外反。 最大径、胴部。 小形甕。	口辺部、横なで。 胴部傾削り。	左より横なで。	色調、赤褐色。 粘土質、仕上げ悪い。 Ⅰ区、Ⅱ区内。
4	甕	胴 底	— — 6.3	胴の中段がふくらみを呈す。 一孔瓶。胴部屈曲しない。 最大径、口縁部と思われる。	横なで、胴部表面起伏多い。	胴上部、横なで。 中、下部磨り。	色調、灰褐色。外部にすす布着と思う黒泥。 粘土質、細砂粒を含む。 Ⅲ区床直上。
5	甕	—	11.9 10.2 3.2	口縁部二重につく。胎部丸く ふくらむ。胴部屈曲せず。 最大径、口辺部。 一孔の小形甕。	口辺部横なで。 胴部上から下へ、又斜に 割目が縦線にある。	口辺部横なで。 内部、重削り。 成形、調整悪い。	色調、外黒褐色。内灰褐色。 粘土細砂粒多い。粗製。 Ⅰ区カマドより床直上。
6	甕	底	— — 6.0	一孔瓶。全体形は不明。 丸味をもって立ち上る。 胴の中央部がふくらんでいる と思われる。	上から割になで。	磨り。	色調、灰褐色。 カマド内。
7	坏	—	15.5 6.4 —	丸底を呈す。 口縁部内湾す。	右横なで。 調整良好。	口縁部横なで。 胴部、横削り。	色調、褐色。 粘土、粘質良好。 焼成長。P2内。
8	坏	—	10.8 6.3 —	丸底を呈す。 口辺部小さく、くの字に外反 最大径、胴上部。	左より、横、斜に磨り	口辺部磨り。 胴部上から磨り。	色調、赤褐色。 全面に、すす布着。 Ⅰ区床直上。
9	高坏	杯 部	19.3 — —	杯上部外反し、壁を有す。 最大径、口辺部。	口縁部横なで。 胴部、上から縦に磨り	上から縦に磨り。	色調、赤褐色。 粘土の粘質良好。 カマド内。

の形状、深さ、住居址内における位置等から主柱穴の機能を有したものとおもわれる。

遺物（第8図1～9）

本住居址で図示し得た土師器は、第8図の9個体で甕、甗、坏、高環形土器がある。1・6・9が流出しているカマド内より出土、2がⅡ区床面直上より、7がP₂内より、他はすべてⅠ区の床面直上より出土しており、カマド及びその周辺に土器は偏在して出土した。詳細は第3表。

甕形土器は、長胴を呈する大形のもの和小形のものがあり、器形は口辺部がくの字状に外反する点と胴部に最大径をもつという共通の特徴がある。甗形土器も大形と小形のものがあり、いずれも一孔を有す。坏形土器は、2点とも良好な粘土をもちいている。

総じて住居址の特徴や土器の比較から、本住居址は鬼高期前葉に位置づけられよう。

（林 幸彦）

3) H3号住居址

遺構（第9図）

本住居址は、11・10・9-D・E・Fグリッド内に位置し、第Ⅱ層、赤黄褐色土層より落ち込んでいる。他遺構との切り合関係はなく、単一にきれいに確認され、また注意すべきことに多量の炭化材、遺物等が検出されており、特に床面中央付近は（第11図）のように集中して残っている。さらに、床面直上、西壁面から茅が検出されている事などからして、焼失住居址であることはまちがいない。

平面プランは、北壁350cm、南壁360cm、東壁370cm、西壁340cmの隅丸方形を呈し、主軸方位は、N-7°-Eを示す。

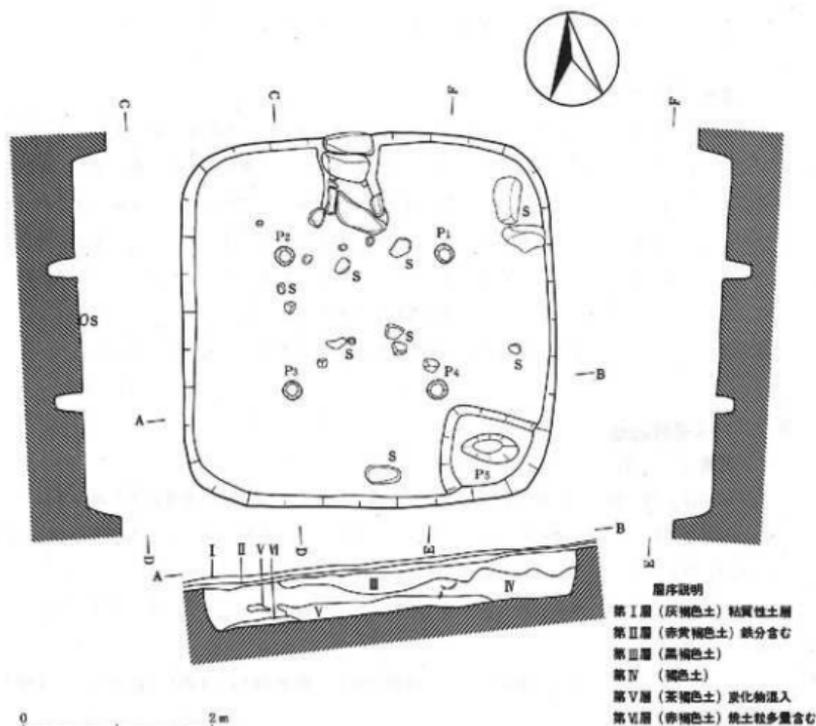
覆土は3層で、上位から黒褐色、褐色、褐色に炭化物が混入しているという状態で、床面直上には焼土塊が存在している。

壁高は35cm～53.5cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。

カマドは、北壁のやや西寄りの中央に位置し、主柱石を初めとした支脚石等、本来のカマドの形態をそのままのこしており、貴重な資料と思われる。

しかし、このカマドは、全体的に石を主要に使用して、がっしりと構築されており、遺物より推測された時期におけるカマドと様相を異にしているため、今後の問題点として研究していく必要があるであろう。

ピットは、5個検出され、P₁は西北隅に位置し、径22cm、深さ25cmの円形を呈す。P₂は、西南隅に位置し、径20cm、深さ28cmの円形を呈す。P₃は、東北隅に位置し、径20cm、深さ30cmの円形を呈す。P₄は、南隅に位置し径20cm、深さ20cmの円形を呈す。P₅は東南隅に壁を利用して大きく、長軸112cm、短軸100cm、深さ56cmの台形を呈した中に、さらにほぼ中央付近に、東西方向に長



第9図 H3号住居址実測図(1:60)

軸をもつ、規模は長軸62cm、短軸30cm、深さ40cmの楕円形を呈すPitが存在する。

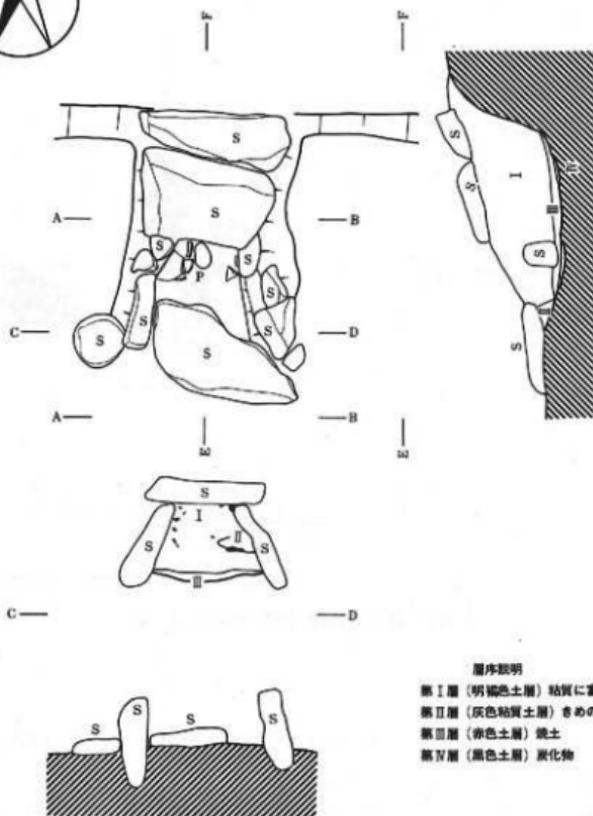
P₁~P₄は、規模といい、その存在する位置から主柱穴とおもわれる。P₅については、その類例があまりないため、早急に結論することはさげよう。

他の施設としては、東北隅に石が2ヶ、きれいに組まれた状態のように存在している。どのような性格をもち、なんの目的で使用されたものか、皆目わからない。

遺物(第12、13図、1~8)

本住居址より出土した遺物のほとんどは、土師器である。そのうち図示しえたものは、甕形土器が3点、甌形土器が2点、高環形土器1点、坏形土器1点、手捏形土器1点の計5点である。

このうち8の高環形土器は、P₂Pitのすぐ脇より出土しており、また3の甕形土器は東北隅に



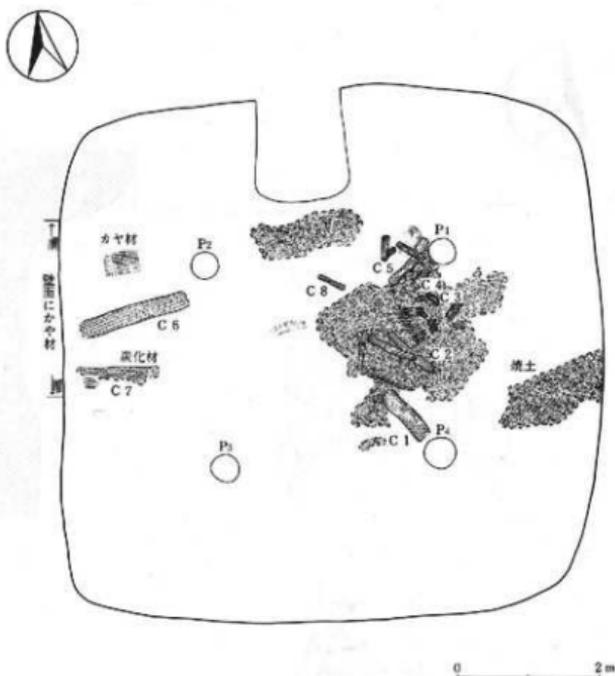
層序説明

- 第Ⅰ層 (明褐色土層) 粘質に富み焼土粒子含む
- 第Ⅱ層 (灰色粘質土層) きめの細かい粘土
- 第Ⅲ層 (赤色土層) 焼土
- 第Ⅳ層 (黒色土層) 炭化物

0 1 m

第10図 H3号住居址カマド実測図 (1:20)

石でかこまれた中より出土している。



第11図 H3号住居址炭化材分布図(1:40)

まとめ

本住居址の大きな特徴は、焼失住居址であるということであろう。他に市道⁽¹⁾遺跡及び跡部町田⁽²⁾遺跡の面遺跡からも、焼失住居址が報告されている。

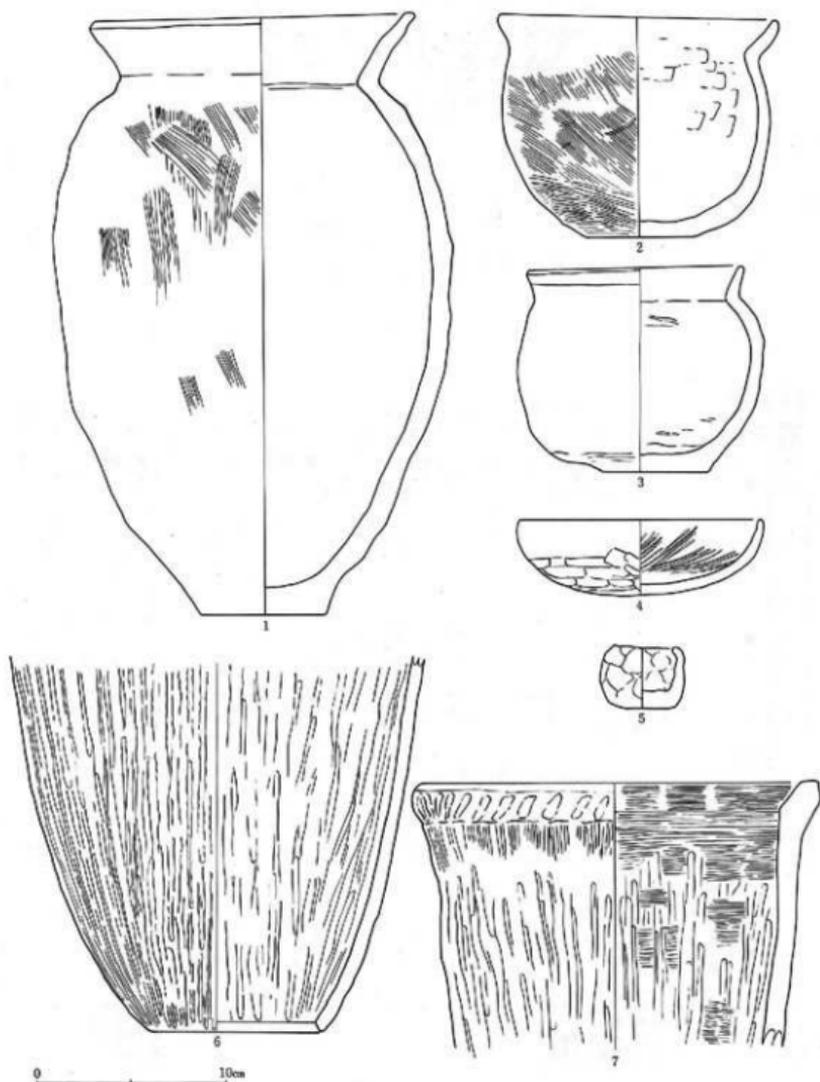
さらに Pit の存在、東北隅の石組の性格についても研究の余地があり、又、カマドについては、ほぼ原形を保っており、貴重な資料であるが、1の長胴の甕形土器及び8の高環形土器からみて、鬼高期の前葉の傾向が^{よく}、石を主要にして構築されている点が興味を引く。

以上のようにいろいろな問題点を提起しており、本住居址は貴重な資料といえよう。

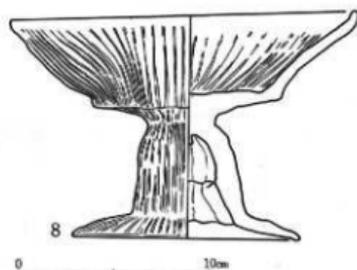
(高村 博文)

註1 藤沢平治 『市道』 佐久市教育委員会

註2 ◇ 『跡部町田』 佐久市教育委員会



第12図 H3号住居址出土遺物実測その1 (1:3)



第13図 H3号住居址出土遺物実測図その2 (1:3)

第4表 H3号住居址出土土器一覽表

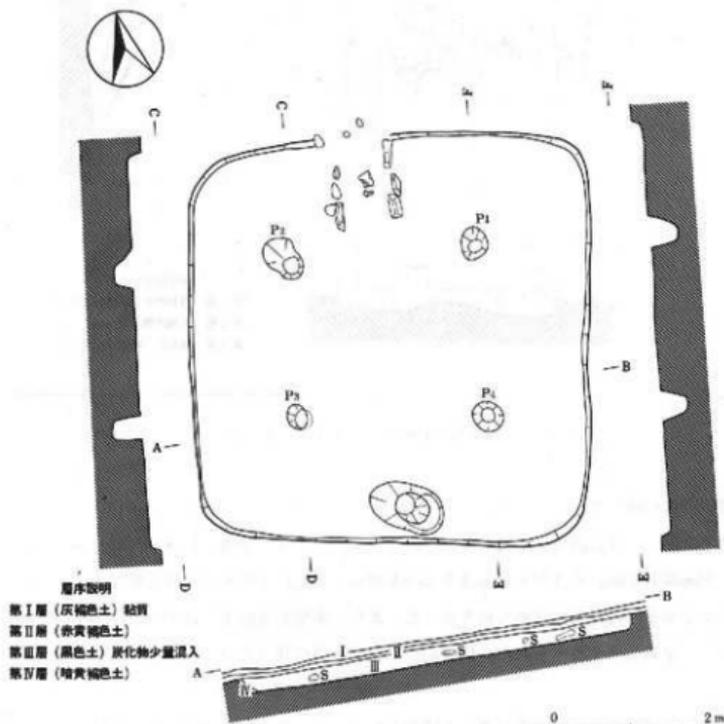
器名	器種	部位	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
1	甕		17.3 31.8 6.4	平底を呈す。口辺部くの字状に外反。長頸。最大径、胴中央部。	口辺部縁まで。 胴部、上から縦斜に荒い刷まで。	横まで、起伏多い。	色調、褐色。 外面にすず布着の黒斑有り。 I区床直上。
2	甕		14.7 12.0 5.7	平底。口辺部くの字状に外反口唇は内曲す。 胴部によくらみをもち、最大径は口辺部。	口辺部縁まで。 胴部、上から斜に刷まで	横まで、一部に荒削の痕	色調、赤褐色。 粘土細砂粒多く含む。 形、不正形、片方ふくらむ I区床直上。
3	甕		11.1 10.9 5.6	平底を呈す。口辺部ゆるく外反。 最大径、胴中央。	口辺部、ロクロ痕。 胴部右より横まで。 一部、第二次焼成による荒げている所有り。	指による、左からのなで	色調、赤褐色。粘土砂粒多く含む。形は一部がほらみ出し形よくない。 I区北内、床直上。
4	杯		12.8 — 4.0	丸底を呈し口唇部内曲。 最大径、口辺部。	上部左より横まで。 下部、方向不定磨削。	横まで、最終段階に下より斜上に荒磨り。	色調、赤褐色。 粘土、白砂粒、細砂粒を多く含む。 I区床直上。
5	手捏		3.5 3.3 2.6	底部に絞り込んでまとめた痕あり。 口唇部不正形。	指で圧した痕、なでた痕あり。 腹で削った痕3ヶ所。	指まで、指で圧した痕あり。	色調、赤褐色。 凹凸多く素朴な土器である。
6	甕	胴 底	— — 9.0	胴中央部によくらみを持つ一孔痕。	腹の荒磨り。	腹の荒磨り。	色調、外黒褐色、内茶褐色。所々に黒茶色の斑点有す。粘土良。 I区、床直上。
7	甕	口 胴	21.6 — —	口辺部、わずかに開く。 最大径口辺部と思われる。 胴部緩曲せず。	口辺部内側より折返して指でおしてある。 横まで、胴部上より縦斜に刷まで。	口辺部、胴上部、刷まで左右。 胴部、腹、左右の刷まで	色調、灰褐色。 粘土良好。 調整粗雑。 II区床直上。
8	高杯		18.6 12.0 12.0	杯の下部に絞りをもち口辺部大きく外反。 杯と台との接合部分が形端にしばり込込である。	上から縦に荒磨り。	杯部、上から縦に荒磨り台の胴部荒削り。底部横まで。	色調、灰褐色、内外すず布着の黒斑有り。 粘土粘質良好。 II区床直上。

4) H4号住居址

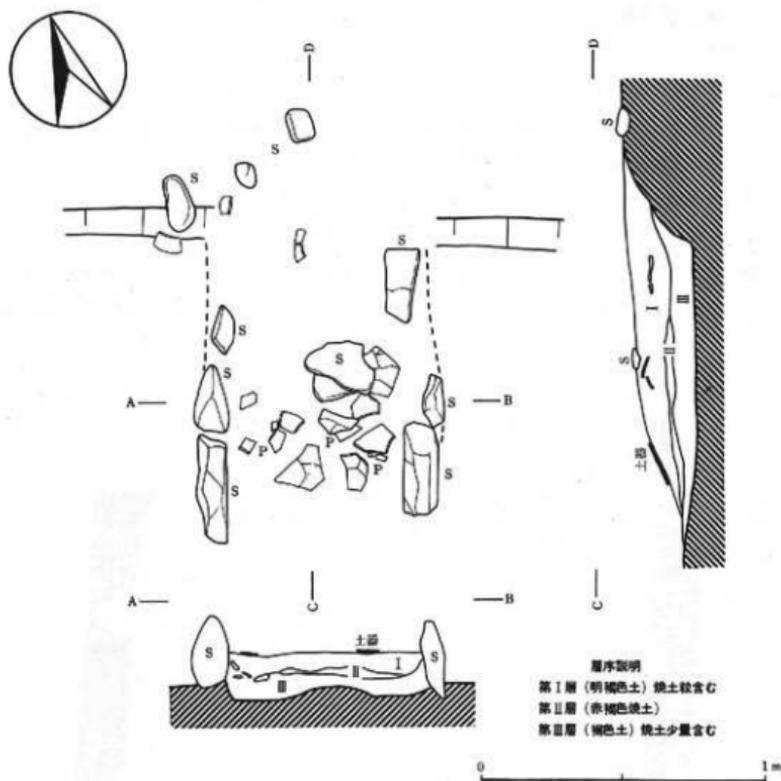
遺構 (第14図)

本住居址は、A・B・C列各1～4グリットの地下約25cm、黄褐色土層上面に検出されたものである。平面プランは隅丸方形で、東壁500cm、西壁450cm、南壁480cm、北壁490cmを測る。現存する壁高は20cmで、主軸方向は、N-14°-Eを示す。

住居址内埋土は黒色土層で、多量の礫を包含していた。礫の大きさは拳大から人頭大で河原石が多く、住居址北側半分に集中して見られた。これら礫群は、ほとんど床面より5～10cm浮いた状態で検出されたが、意図的に配置されたような痕跡は認められなかった。ただ南東隅には、30×40cm前後の偏平な割石がほぼ水平にみられた。以上のことから、礫群は、本住居址の廃絶後、



第14図 H4号住居址実測図 (1:60)



第15図 H4号住居址カマド実測図 (1:20)

完全に埋没しない時点で、人為的一括して投入あるいは持込まれた可能性が強い。

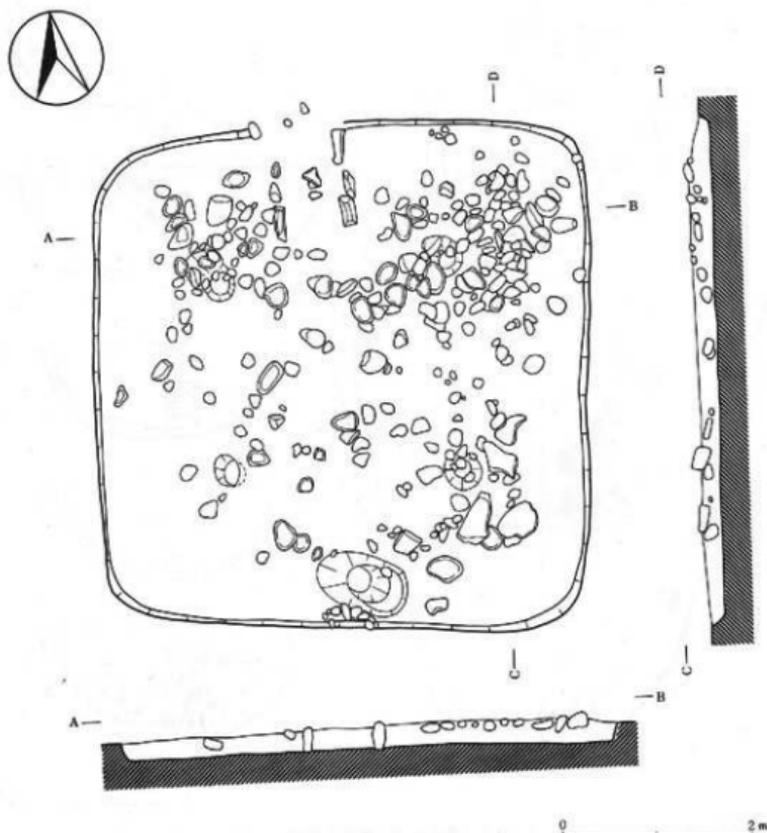
確認されたピットは合計4ケで、 P_1 は33×43cmの楕円形で深さ35cm、 P_2 は60×40cm深さ25cm、 P_3 は25×33cm深さ40cm、 P_4 は37×40cm深さ35cmを測る。ともに支柱穴で、柱穴間は東西250cm×南北220cmである。補助穴は認められなかった。また、南壁中央直下には100cm×60cmの楕円形で深さ38cmの落ち込みが認められた。位置的に入口部施設に伴うものかも知れないが、その性格は不明である。

カマドは、北壁中央よりやや西に寄って構築されていた。袖は長さ108cmで、板状の割石と河原石を直立させて用いている。一般に白色粘土の残存がみられることから、石を芯にした粘土カ

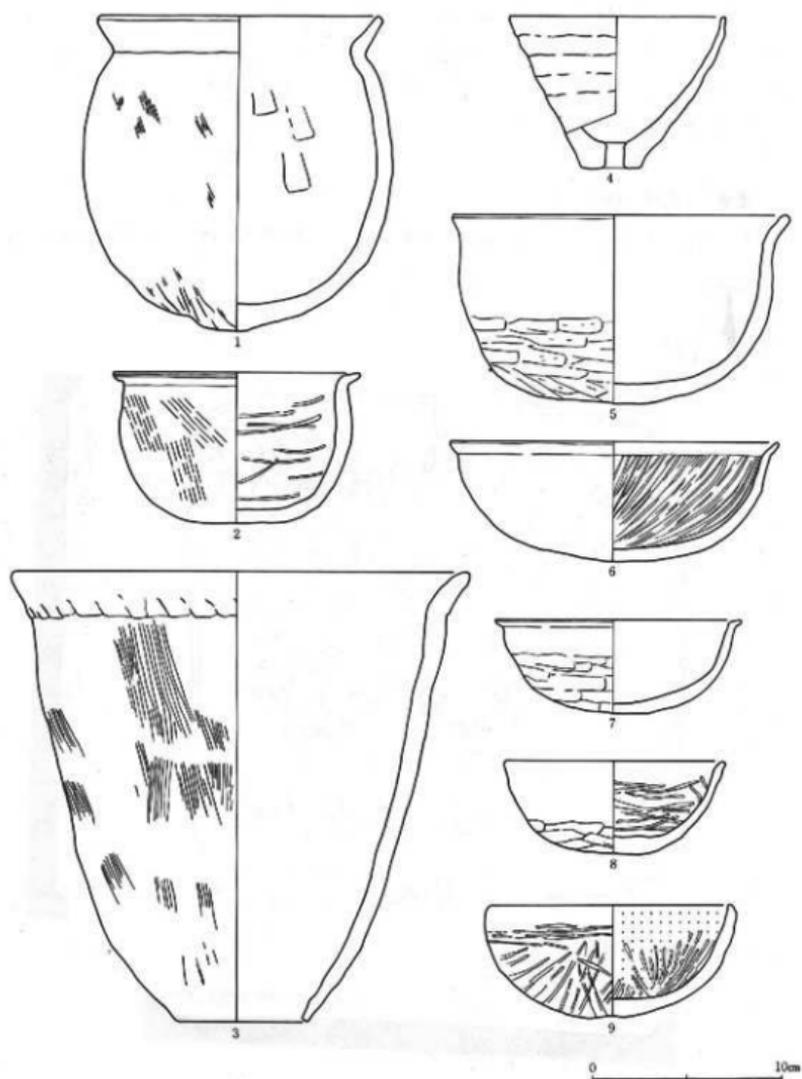
マドであったものと思われる。焚口は巾60cmで、内部には、支脚石及び支脚石を使用した痕跡は認められなかった。また煙道についても、壁から20cmほど張り出しているのみで、明確なものも確認されなかった。なお、カマド内に焼土の厚い堆積がみられることから、かなり長期間にわたって使用されたものといえる。

遺物 (第17図、18図、1~14)

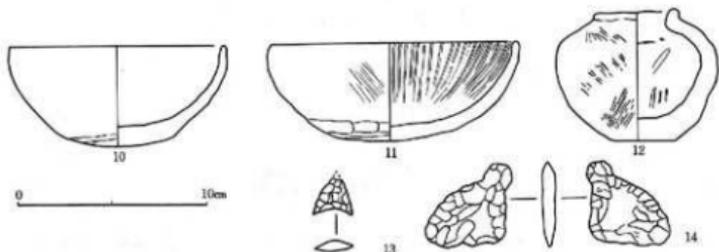
遺物の出土状態は、カマド内部の焼土の堆積上に、主に壺形土器の破片が集中して認められた。



第16図 H4号住居址竈土内破群実測図(1:60)



第17図 H4号住居址出土遺物実測図その1 (1:3)



第18図 H4号住居址出土遺物実測図その2 (1:3)13,14は(1:2)

他の遺物は、一部が住居址東壁に沿って集中していた以外は、全体に散在して検出された。検出レベルは、ほとんど礎群下のものであるが、床面直上出土のものは極めて少ない。

出土遺物は全て土器で、図示した12点は完形もしくは完形に近いものばかりである。器種は甕形土器、甔形土器、坏形土器、小形壺形土器の4種に大別される。

甕形土器1は、口径と器高に差がほとんどなく、球形の胴部に不安定な底部をもつものである。

甔形土器3と4は、器形と法量に著しい相違が認められる。3は口径24.3cm器高24cmと大形で、口辺部は折返し状で指オサエにより整形され、底部に径7cmの穿孔を有する。4は口径11.5cm、器高8.2cmと小形で、底部に径1cmの穿孔を有する。整形は極めて雑で外面には巻き上げ痕が残っている。

坏形土器2・4～11は、器形の特徴から3タイプに細分される。すなわち、A：安定した底部をもち、体部はふくらみをもって直立気味に立ち上がり、口辺部が外反するもの(2・5)、B：底部は丸底で、体部はゆるく湾曲して立ち上がり、口辺部が短く外反するもの(6・7・8)、C：底部と体部はB同様であるが、口辺部が内湾するもの(9・10・11)である。

法量的にみると、Aは口径が器高の2倍以下、BとCは口径が器高の2倍以上である。整形では底部付近の外面がヘラケズリされるもの(5～8・10・11)と内面が放射状にヘラミガキされるもの(6・9・11)が多い。

小形壺形土器12は、整形及び器壁の厚さ等から、手捏的なミニチュア土器といえる。須恵器短頸壺を模倣した可能性をもつものである。

(白田 武正)

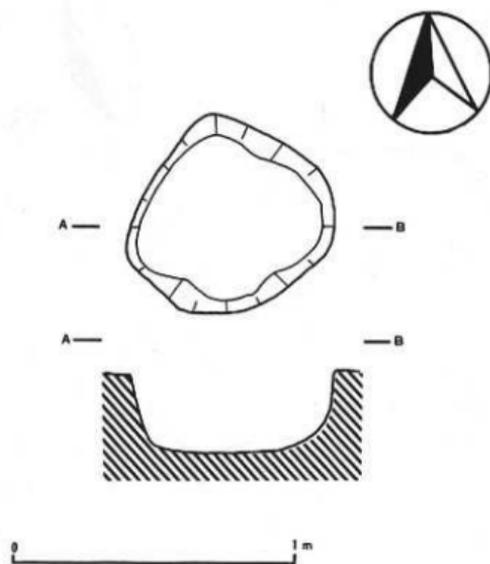
第5表 H4号住居出土土器一覧表

発掘番号	器種	部位	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
1	甕		15.1 16.8	丸底を呈し、胴部によく丸みをもつ。口辺部くの字状に外反。 最大径は胴部	口辺部右より縦筋などで、胴部上より縦斜に筋などで、調整良くない。	縦筋などで、所々に彫削の後あり。	色調、赤褐色。内外とも所々にすすの布着あり。底部に大凹みあり。成形悪い。I区床直上。
2	坏		13.0 8.0 4.5	平底を呈す。口辺部短く、くの字状に外反。 最大径口辺部。胴部は丸くふくらんでいる。	口辺部横などで寛磨き胴部上から縦斜に磨き、一部に胴の垂直あり。	横などで磨磨き。	色調、赤褐色。胎土、粘質良く焼成良し。 II区床直上。
3	甕		(24.3) (24.0) (6.9)	口辺部下に横をもつ、外反。胴部は屈曲しない。 最大径、口辺部。 一孔あり。	口辺部内側より折り返し指先でおさえる横などで、胴部筋などで。	口辺部左より縦筋などで、胴部、縦斜の筋などで。	色調、赤褐色。所々に、すすの布着した黒地有り。 カマド内。
4	甕		11.5 8.2 3.1	底部より斜直上。ふくらみ無し。 一孔小形甕。 底部平。	上から縦筋などで、胴の半分より上に粘土ひもの巻上げ痕あり、表面起伏多い。	右から横などで。	色調、赤褐色。口縁部凹形でゆがんでいる。器全体すす布着。IV区床直上。
5	坏		17.8 10.0	丸底を呈し、口辺部で更にゆるく外反。 最大径、口辺部。	口辺部口縁あり横筋などで、胴部右より彫削、上部横筋などで、表面起伏多し。	横筋などで、凹凸の起伏多し。	内面に少量の砂粒を含む。形不正形。 II区、床直上。
6	坏		17.4 6.0	丸底を呈し、口辺部短く、外反し磨く。 最大径、口辺部。	口辺部横磨磨き。胴部横筋などで更に横磨磨き。 所々に彫削の痕。	口辺部横磨磨き。胴部横磨磨き。	色調、黄褐色。胎土良好、きれいに成形してある。 III区床直上。
7	坏		13.1 5.0	丸底を呈し、口辺部短く、くの字状に外反。 最大径、口辺部。	口辺部磨磨き。胴部左から彫削あり。	全体横筋などで。	色調、赤褐色。胎土、砂粒わずかに含む。 IV区床直上。
8	坏		11.6 5.0	丸底を呈し、口辺部特に磨かない。	口辺部横筋などで、胴部、磨削りし横筋などで。凹凸多い。	横に寛筋などで、凹凸の起伏多く調整悪い。	色調、茶褐色。内面すす布着黒い。胎土砂粒多し。 カマド内。
9	坏		13.4 6.0	丸底を呈す。口唇部内側に曲り込む。 最大径、口辺部。	横筋の彫削の痕広く残る。調整悪く、表面起伏多い。	縦筋に広く彫削りの痕残る。 小さい凹み多し。	色調、茶褐色。内面黒色塗彩。蓋でやたらにかいたと思われる痕あり。 IV区床直上。
10	坏		11.6 5.4	丸底を呈す。 最大径は口辺部。	口辺部磨磨筋などで、胴部右下より斜に磨磨き、底部一部磨削り。	横筋などで、一部に彫削あり。	色調、茶褐色。内外にすす布着黒地部成形悪い。 II区床直上。
11	坏		13.2 5.3	丸底を呈し、口唇部は内側に曲り込む。 最大径、口辺部。	口辺部横筋などで、口唇部の横筋有り。胴部磨磨斜に筋などで。	磨磨き。上から下に施状に磨かれている。	色調、黒褐色。胎土、砂粒多く含む。調整悪い。 I区床直上。
12	壺		4.5 7.0 3.4	平底を呈し、胴部がふくらむ。 口縁部立ち上がり少ない。 最大径胴上部。	上部磨磨筋などで、胴部磨磨斜上から筋などで、各所に死い筋残る。	縦筋に筋などで、所々に彫削りの痕残る。	色調、赤褐色。胎土、砂粒多く含む。調整、成形とも悪い。 I区床直上。

2 土粒及び溝状遺構

1) D1号土粒 (第19図)

本遺構は、D-4・5グリッドより検出された。



第19図 D1号土坑実測図(1:20)

平面プランは、長径72cm、短径70cmを測り、ややゆがみはあるが、ほぼ円形を呈し、主軸方位は、 $N-5^{\circ}-E$ を示す。

壁は、なだらかに立上って、26cmを測る。底面中央は30cmでなべ底状の形の整った形状を呈している。

さらに、本遺構は全体的に小形であることも大きな特徴といえよう。

本遺構から、遺物の出土は皆無であり、性格、用途、時期等を決定することは、でき得なかった。

(島田 恵子)

2) D2号土坑(第20図)

本遺構は、H2号住居址の西北の隅に位置し、G-0、F-0グリッドより検出された。

平面プランは、南北140cm、東西106cmを計る不正形の楕円を呈し、主軸方位は、 $N-3^{\circ}-E$ を示す。

壁は、なだらかに落ち、底は、南に浅く、北側にゆるやかに落ち、最深部は確認面より48cmを計測した。

本遺構からの出土遺物等はなく、遺構の性格は不明である。

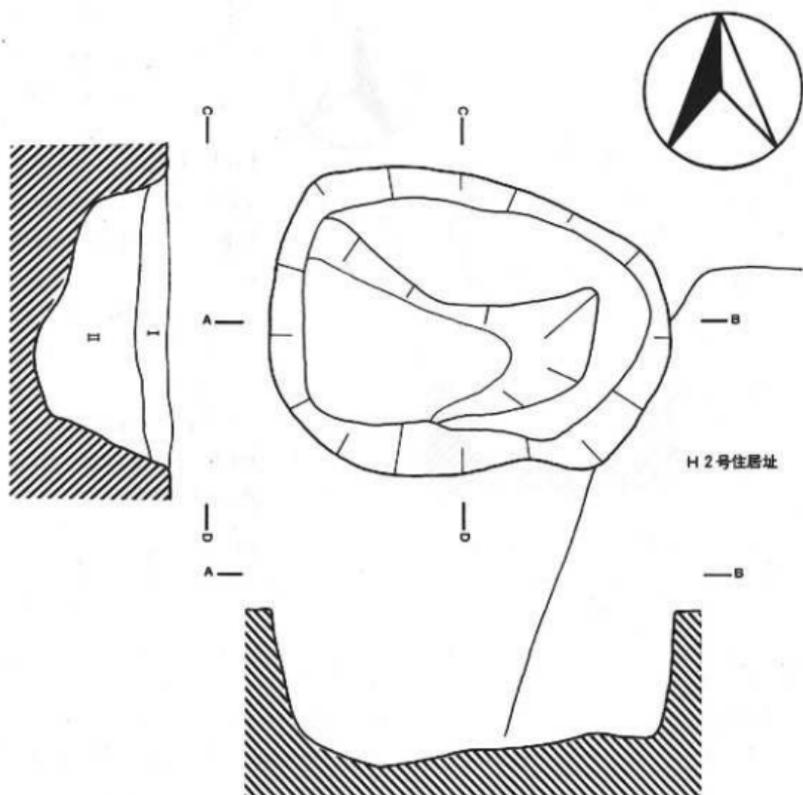
(武藤 金・三石 延雄)

3) D3号土坑(第21図)

本遺構は、H2号住居址の南西に位置し、I-0・1グリッドより検出された。

平面プランは、長軸260cm、短軸100cmを計り、やや不整形の楕円を呈する。

主軸方位は、 $N-13^{\circ}-E$ を示す。壁は、南東側でなだらかに立ち、西側でやや急に立ちあがる。最深部は、確認面より32cmを測りやや浅めである。

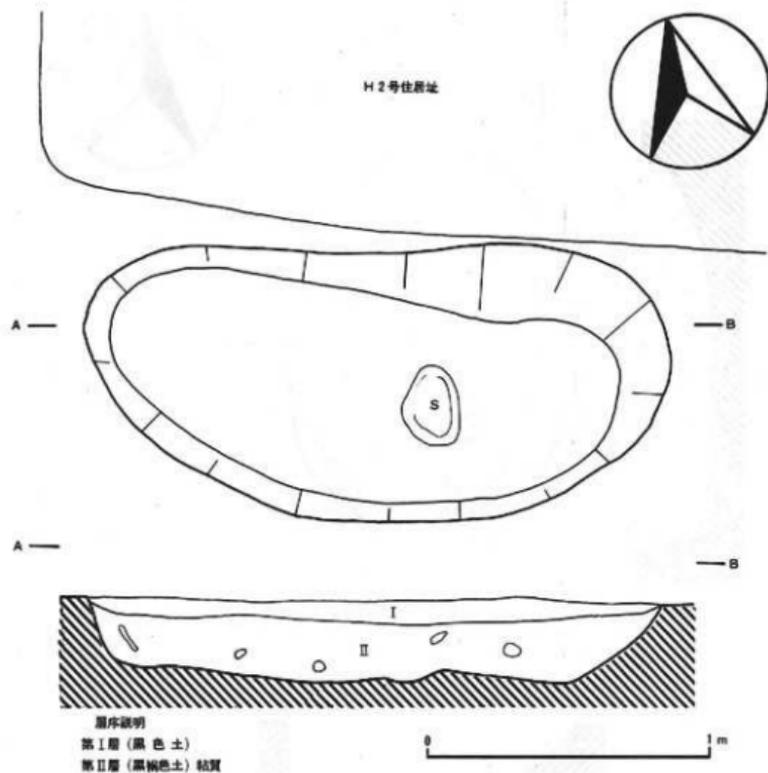


層序説明
 第I層(黒褐色土) 粘土細く、粘性少ない。
 ローム粒子を混入する。
 第II層(褐色土) 粘土細く粘性あり、ローム
 粘土と炭化物が少量混入
 入る。

第20図 D2号土坑実測図(1:20)

本遺構から出土遺物はなく、その性格等不明である。

(武藤 金・三石 延雄)

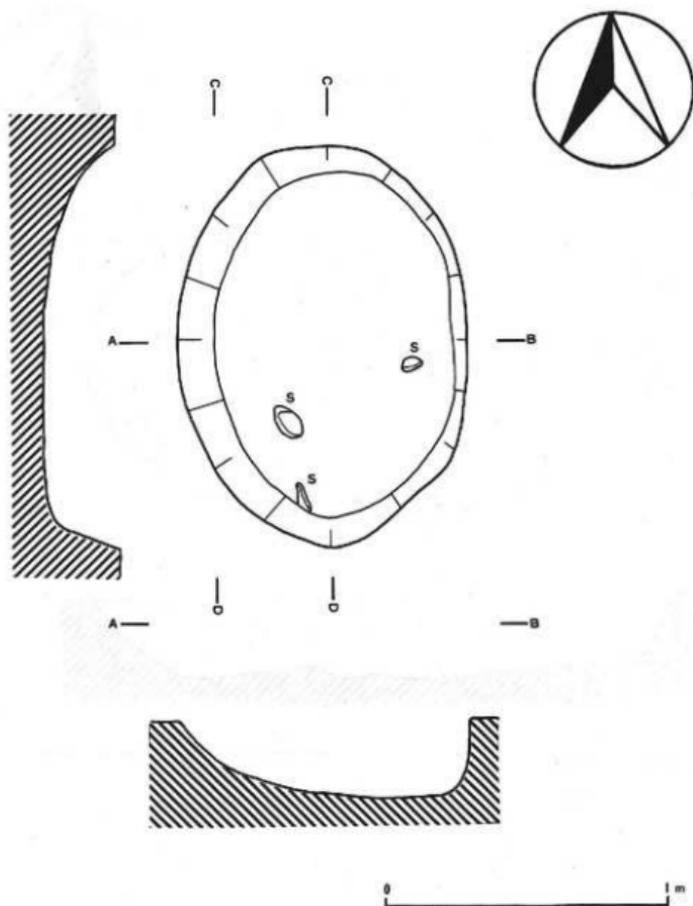


第21図 D 3号土坑実測図 (1 : 20)

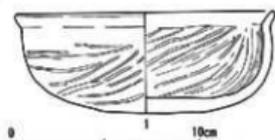
4) D 4号土坑 (第23図)

本遺構は、H 2号住居址内中央をやや西北に寄った、床面下より検出された。

平面プランは、南北に140cm、東西に100cmを計る楕円形を呈する。深さは、H 2号住居址の床面より最深部で25cmを計る浅いものであり、壁の立ちあがりは、南東側がやや急に立ちあがり、北西側はゆるやかに立ち上っている。



第22図 D 4号土坑実測図(1:20)



第23図 D 4号土坑出土遺物実測図(1:30)

本遺構の出土遺物は比較的多く、土師、坏および破片、變胴部破片、縄文前期破片、打製石器等が出土している。

本遺構は、住居址の内に在り、上部確認は不可能であり、又遺物は土師器と縄文前期が混り、構築の時期、その性格等不明瞭である。

(三石 延雄)

第6表 D4号土坑出土土器一覧表

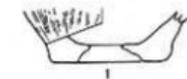
挿図番号	器種	部位	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
1	環		13.9 5.4 5.0	口辺短かく、くの字状に外反 底部丸味をもつ。 最大径、口辺部。	口辺部横なで。 胴部上より斜に寛磨 き。	口辺部横なで。胴部 上から斜に寛なで、 底部、艶磨の痕。	色調、黒褐色。 胎土、粘質よく粒子 細かい。

5) M1号溝状遺構 (第24図)

本遺構は、H-7~11、G-8~11グリッドに位置し、平面プランは、長さ9.4m、幅約1mを



第24図 M1号溝状遺構実測図(1:80)



計る弧状を呈す。

深さは、西側において33cm、中央で68cm、東側で28cmを計り、両端が

第25図 M1号溝状遺構
出土遺物実測図(1:3)

浅く、やや狭くなっている。然し溝状は呈しているが、通常の溝とは性格を異にしていた事は事実であり、尚、南側に径7.5mを計る円をえがいている事も確認されたが、南側は調査対象区外であり発掘するに至らなかった。出土遺物はそのほとんどが、弥生後期の破片であり、中に赤色塗彩小形形土器底部に穴を穿った、底部穿孔土器破片が出土した。(三石 延雄)

第7表 M1号溝状遺構出土土器一覧表

挿図番号	器種	部位	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
1	壺	底	6.0	弥生底部穿孔土器。 孔の大きさ1.2cm。	磨磨き。	横なで。	色調、赤色塗彩。

V 遺構外の遺物

1 縄文時代の遺物

ア) 土 器

本遺跡から出土した縄文時代の土器は、主にC・D・E・F-2~7グリッドの第2層より出土している。

総計67点の土器片は、かなりとびとびの時間的隔たりがあり、第1群土器（縄文前期初頭の土器）53点と第2群土器（縄文後期初頭の土器）14点の2群に大別される。また、尖底土器底部を除いた全破片が小破片であったため、器形を知りうる土器はなく、文様構成等の判別も非常に困難をきたした。

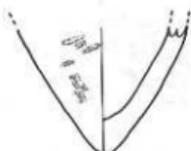
1) 第1群土器（縄文前期初頭の土器、第26・27図1~43・45）

A [第26図1] 尖底土器の尖底部位は2個体の出土をみた。他の1個体は尖底部位が2cm程残存していたが一部欠損していたため図示できなかった。胎土には繊維が多量に含まれており、外側は赤褐色を呈し、中間繊維含有部分は黒色、内側は茶色で3色に色別される。しかし、外側は熱をうけてもろくなっており、縄文の施文は摩滅していて拓影にあらわれにくかったため実測で図示した。羽状縄文に該当するとおもわれる。器厚は0.8~1.2cmで全体に硬い。

B [2.5.6.9.10. 32. 42. 45] 胎土に繊維を多量に含んだ斜縄文土器である。2.6.9.10. 32は粗大な施文であり、42は比較的細い施文で覆われている。原体を縦位に回転し、R L 6点、L R 1点がある。裏面は繊維痕の乱れが顕著で指頭おさえがみられる。又5は絡糸体圧痕文が横行にあり、他とは様相を異にする。器厚は0.8~1.2cmで硬質である。6.32に結節が用いられている。

C [3.4.7.12. 20. 29~31. 34. 35. 39. 40] いわゆる羽状縄文の一群である。粗大であるものと細い [8.11. . 16~19. 28. 38] 羽状縄文とに分けられる。施文は縄文原体を交互に回転させ全面を覆ったもので、35. 39は結節羽状縄文を用いていることがうかがえる。粗大であるものと細い施文であるものの両方とも裏面は繊維痕が顕著である。11は外面に指頭おさえがみられる。器厚は細い施文の8点が比較的うすく0.8cmで、粗大な施文の施された12点は1cmである。やはり全体的に硬質である。また、39は裏面に種子痕跡がみられる。

D [14. 22~26. 33] この縄文原体は、最も固い繊維を振り合せ、更に振り合せた縄を簡単に結び合せたもので、施文するとハの字形になり、原体回転は主に斜縄文と同一の方法を用いている。一寸した工夫で独特の文様を展開させている。その内の26はより固くて細い繊維によるもの



1, G-6グリッド



2, C-5 II層



3, C-5 II層



4, G-5 II層



5, D-5 II層



6, D-5 II層



7, C, D-3, 4 II層



8, G-5 II層



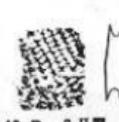
9, F-5 II層



10, F-5 II層



11, G-5 No.21



12, D-3 II層



13, F-4 II層



14, F-4 II層



15, Dセクション



16, G-7 II層



17, G-7 I層



18, F-3 II層



19, G-7 II層



20, G-5 II層



21, D-2 No.101



22, G-5 II層



23, G-5 II層



24, G-5 II層



25, G-5 II層



26, F-4 II層



27, F-5 II層



28, F-4 II層



29, Dセクション

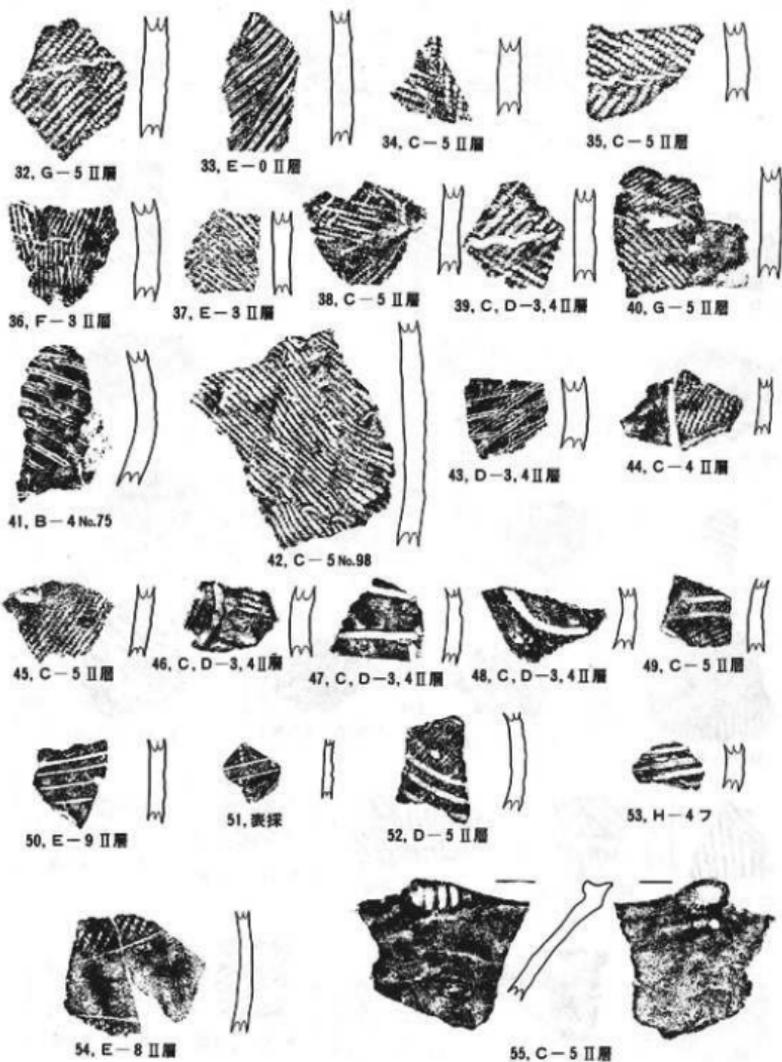


30, C-5 II層



31, E-2 II層

第26図 縄文前期初頭の土器拓影(1:3)



第27図 縄文前期初頭および後期初頭の土器拓影(1:3)

である。繊維を多量に含み、かなり硬質で内面は平滑に仕上げている。器厚は1cmで胎土が良好である。

E [41. 43] この施文は、単純な撚糸文を各2本と3本の単位で給糸体に連ねたものを用いて交差させて施文してある。43のように文様体としては効果をあげている。繊維を含み、内面は平滑に仕上げられており、かなり硬質で器厚は1cmである。

F [21] この施文は、撚糸を幅広くして条をつくり出したもので、材料の繊維と撚りがやわらかであったためか、はっきりとした条痕が出ていない。やや粗雑な施文である。繊維含有量は少なく、内面は凸凹である。器厚は0.8cmで、内面はかなり硬質であるが、外面は2次焼成のためか、やや軟質さみである。

G [13. 27. 36] 条痕文系土器である。条痕も規則性はなく、27のように交差しているものと、斜線状のものがある。繊維含有量は比較的多く、内外面共茶褐色を呈し、器厚は1cmで硬質である。

2) 第2群土器 (縄文後期初頭の土器、第27図44. 46~55)

A [44. 46. 54] 沈線と縄文とで文様が構成されたもので、沈線の区画内に斜縄文が施されている。研磨は多少施されており、器厚は0.8~1cmである。

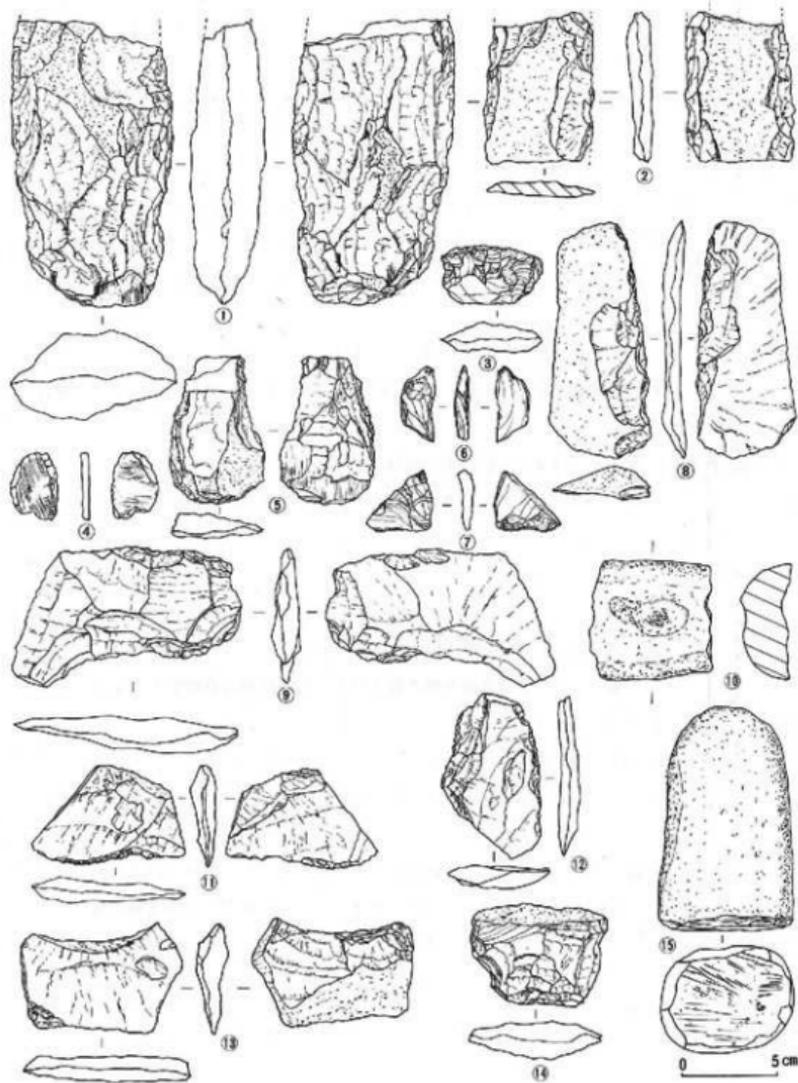
B [47. 48. 50. 53] 平行沈線で区切られた文様を呈するのは、47. 50. 53の3点である。しかし、この3点も小片なので、沈線だけで施文されたかは不明である。48は沈線が曲線的に施されている。わずかに研磨されており、器厚は0.8~1cmである。

C [49. 52] 縄文を地文とした上に沈線が施されている。49の沈線は直線的であるが、52は曲線的な沈線が施されている。

D [51] 平行沈線の区画内に縄文が施され、沈線の上下に円形の小孔を穿ったもので、よく研磨されており、器厚は0.5cmとうすく、胎土も良好で赤褐色を呈す。注口土器の小片とおもわれる。

E [55] 唯一の口辺部破片であり、器形は鉢形であるとおもわれる。器面は無文だが口縁の山形に突起した下部の内外面に細工が施されている。外側には3条の楕円弧状の沈線が施されており、内側には楕円形の凹みが施され、その下部は円形の孔が穿たれている。色調は黒褐色を呈し、やや研磨されている。

(島田 恵子)



第28圖 井上遺跡出土石器実測圖（縮尺1/5）

石器（第28図、図版12の2）

本遺跡より出土した石器を一括して第28図に示した。1はF-7グリッド、3はG-5グリッド、8はD-8グリッド、10はE-9グリッド、13はF-6グリッドより、4・11はH 2号住居址、5・9・12はH 3号住居址、15はH 4号住居址よりそれぞれ出土した。2・6・7・14は表面採集資料である。

石質は、粘板岩がもっとも多く5・8・9・11・12・13の6点である。砂岩は2・14、15の2点がある。3・5はチャート、1は玄武岩、10は安山岩、4は滑石である。

1・2・5・8は打製石斧であり、8を除いて欠損部がある。5が楔形を呈すほかは、短冊形とおもわれる。1と5には、図下部の先端に剝離面が消失するかのような縦方向の磨耗痕がみられる。それは両面におよんでいる。

3・6・7及び9・11・12・13・14は、縁辺に細かな剝離を加えて刃部を作出しており、スクレパーの機能を有すものといえよう。6の図上縁辺及び7の図下縁辺には、刃こぼれと直交する削痕がみられる。

15は上面が平坦面となっており、不定方向の磨耗痕が残っている。また、この面に接する側面も一回りすべての箇所と同様な磨耗痕がうかがえる。

4は、滑石模造品というべきものであろう。表裏面とも多方向から加工されており、その痕が明確にみられる。他にも未加工の3点がいずれもH 2号住居址より出土している。

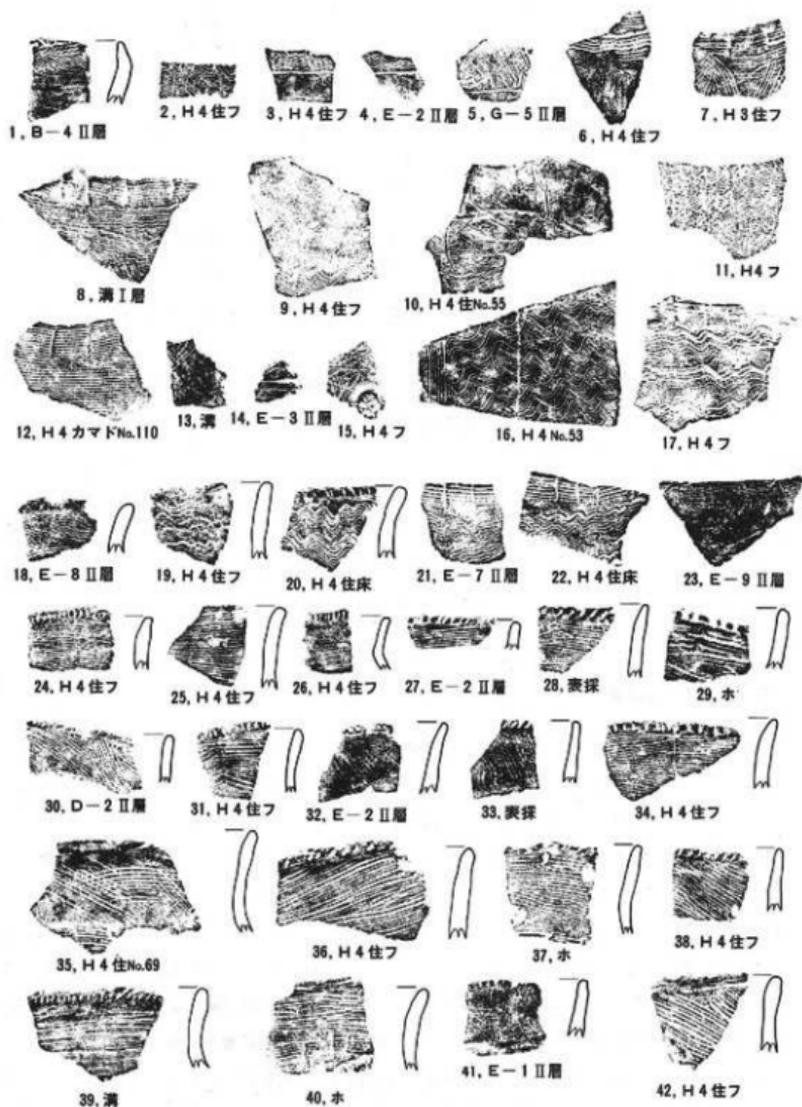
（林 幸彦）

2 弥生時代の遺物

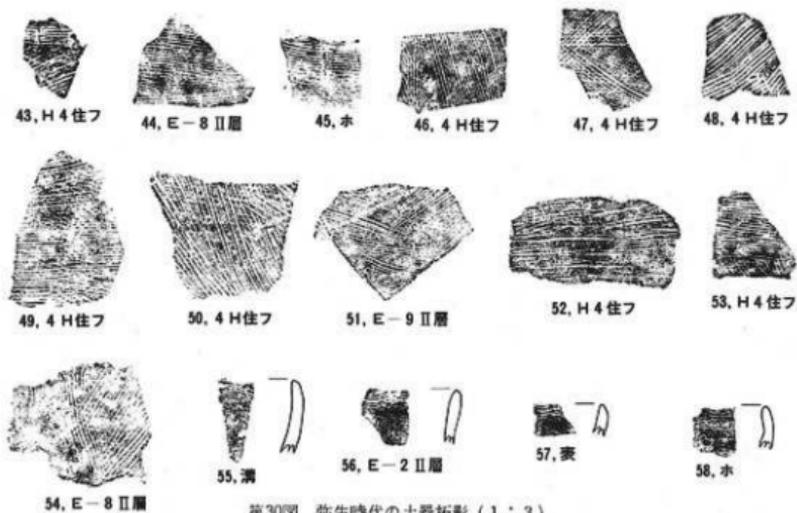
ここでは、本遺跡で出土した弥生時代の遺物を一括して扱うこととしたい。資料はすべて弥生土器片で、グリッドの包含層や古墳時代住居址埋土（特に4号住が多く全体の約半数以上を占める）、さらに、時代不明の溝状遺構等から出土したものである。

破片であるため器形全体を推定することはできないが、文様、整形、部位等から器種を判別すると、壺形土器1～15、甕形土器16～54、坏形土器55～58、甌形土器69、高坏形土器70・71の5種に分類することができる。

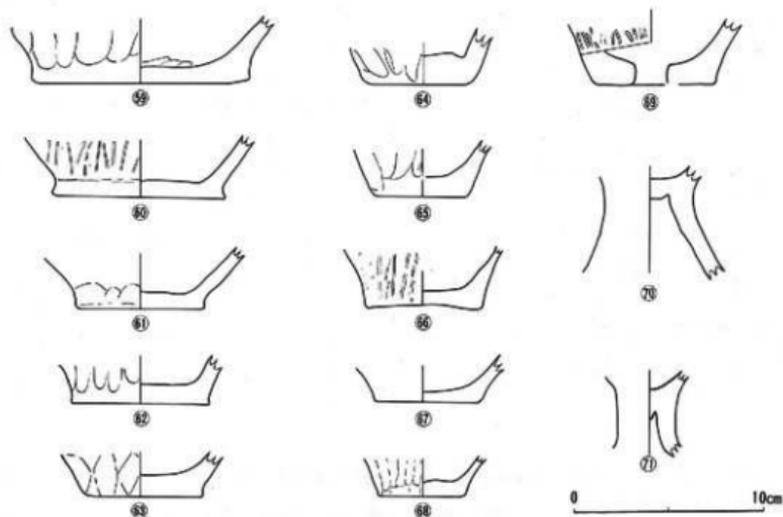
壺形土器1・2は、口辺部がくの字状に屈曲して内湾気味に立ち上がるもので、外面に櫛描波状文が施されている。頸部の文様をみると、3～5は2本のヘラ描沈線文を横走させ、その間に波状文を配したものである。波状文のみのもの、6・9～11や櫛描簾状文をめぐらしたもの7・8・12もある。ヘラ描沈線文だけによる施文には、13の逆三角形区画文と14の平行斜状文がある。さらに、15のようにいくつかの刺突文をもったボタン状突起を貼付する例もみられる。すべて、赤色塗彩はされていない。



第29図 弥生時代の土器拓影(1:3)



第30図 弥生時代の土器拓影 (1:3)



第31図 弥生時代の土器実測図 (1:3)

第8表 弥生時代出土器一覧表

標本 番号	器種	部位	注量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
59	不明	底部	— 11.6	底部角気味摩滅が見られる。	底部より指で撫であげた跡がある。	底には剝削の跡があり、内面は横に磨かれている。	赤色塗彩の痕跡がありほとんど落ちて黄褐色を呈している。
60	不明	底部	— 9.2	平底、底部がやや外側に開いている。	下より上に磨磨されている。	内面には横なでがある。	色調灰白色を呈している。
61	不明	底部	— 6.7	平底、やや角気味。	底部近くを指でおさえた跡があり、赤色塗彩の跡がある。	内面にも赤色塗彩の跡が僅かに残っている。	色調塗彩が落ちて灰白色を呈している。
62	不明	底部	— 7.3	平底角気味。	指で撫であげた跡がある。	指で横に撫でた跡がある。	赤色塗彩の痕跡があり、落ちて黄褐色を呈す。
63	不明	底部	— 6.2	平底角気味。	底部近くを指で押さえた跡がある。	底は荒く削っており、内面の底は粗雑である。一部に赤く塗った跡がある。	胎土は砂粒が多く調成は粗雑である。
64	不明	底部	— 5.2	平底、やや丸味を持つ。	指頭で撫であげた痕がある。	内面底部は指で撫でてあり、底部に底の痕が付着している。	色調は灰白色。
65	不明	底部	— 5.3	平底、やや丸味を持つ。	指で撫であげ磨いている。赤色塗彩の痕がある。	指で撫でて磨いている。	ススが付着している。
66	不明	底部	— 6.2	平底角気味、底が凹みやや湾曲している。	下から上に磨削りがある。	指で撫でて磨いている。	色調は黄褐色を呈している。
67	不明	底部	— 5.6	平底やや角気味。	赤色塗彩。	赤色塗彩。	両面共塗彩がある。
68	不明	底部	— 4.7	平底角気味。	指で撫であげてある。	内面にスス状をした黒い物が付着している。	色調灰白色を呈している。
69	甕	底部	— 6.4	平底、やや丸味。	磨磨き、赤色塗彩のあとがある。	指で撫でたあとがある。	色調黄褐色。
70	高坏	脚部	— —	広くラップ状に開く。	赤色塗彩。 磨磨き。	磨削り。	胎土に破粒を含む。
71	高坏	脚部	— —	柱状で、先端で短く開く。	赤色塗彩。 磨磨き。	磨削り。	小さなホソがある。

甕形土器は、口縁端部にヘラ状工具によって刻み目を施すものが多く(19点)、何も施されぬものは35・40・42と極めて少ない。頸部には簾状文が右回り(上から見て時計回り)にめぐることが多い。口辺部から胴部にかけては、波状文18~23と水平または斜め方向の直線文24~54のどちらかが施されるが、後者の傾向が強い。

坏形土器55～58は、口辺部が内湾し外面に波状文が一帯施されたものである。内外面とも赤色塗彩されている。

甗形土器69は一孔を有するものである。焼成前の穿孔である。

高坏形土器は脚部のみであるが、裾部が広くラッパ状に広く70と柱状で短く開く71の二者がある。ともに外面が赤色塗彩されている。

なお、底部破片はほとんど壺形土器か甗形土器に該当するものであろうが、分類の根拠が乏しいため、あえて判別することはさけない。(白田 武正)

3 奈良時代以降の遺物

包含層から、平安期と思われる土師器坏形土器の糸切り底と須恵器片が少量出土している。ともに小破片であるため図示し得なかった。(白田 武正)

VI 総 括

遺構と遺物の詳細については、各項で述べられているので、ここでは、調査の成果と問題点を提起して総括としたい。

遺構

井上遺跡で検出された遺構は、竪穴住居址4軒、土壇4基、溝状遺構1基である。

H1号住居址は、本遺跡発掘の契機となった工事中の発見によるもので、一部残存するのみであったが、他の3軒については遺存状態は極めて良好であった。特にH3号住居址は焼失住居で壁高も高く、床面には炭化物や炭化材が認められたが、部分的であるため、配置等から上層構造を推定するには至らなかった。各住居址の平面形態は、隅丸方形で北壁にカマドをもち、主柱穴は4本である。カマドを中心とした主軸方向もほぼ同一である。内部施設としてのカマドは、石と粘土の両者を用いて構築している。H2号住居址は軸石の撤去された痕跡が認められたが、H3号住居址は一部の欠損もなく完全な形で検出された。住居の規模は、H2号住居址とH4号住居址が床面積22㎡前後ではほぼ同一、H3号住居址は床面積12㎡と小規模である。床面積や壁高の問題を除くと共通性をもった面が多い。

土壇については切り合い関係が認められ、2号と4号が2号住居地を切っている。プランの規格性や伴出遺物が認められず、性格は不明である。

溝状遺構は、一部が対象地外にかかるため全容を明らかにすることはできなかったが、弧状にめぐることが確認された。推定直径7.5mの円形で、部分的に不連続になる可能性が高い。古墳の周溝との見方もできるが、溝の規模及び溝内出土遺物等から、弥生時代の円形周溝溝の一部ともみられる。周溝中央部における主体部等の検出が不可能であったため遮断はできない。

今回の調査では、諸々の制約上ほぼ同時期の古墳時代後期の住居址4軒を検出するにとどまったが、おそらく千曲川によって形成されたこの段丘上には、さらに何軒かの住居によって構成された一集落が存在していたものと考えられる。事実、発掘地点南方30mの畑地からは、同時期の土師器一括資料が出土している。

(由井 茂也・白田 武正)

第9表 井上遺跡検出住居址一覧表

遺構	平面プラン					壁高	カマド	柱穴	時期	備考	
	形態	規模									主軸方位
		北壁	西壁	南壁	東壁						
H 1	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	完形土器 3 白玉 1	
H 2	方形	480	440	480	420	N-18°-E 22.0 ↓ 29.0	北	4	鬼高前葉		
H 3	四角 四角	350	340	360	370	N-7°-E 35.0 ↓ 53.5	北	4	鬼高前葉	焼 灰	
H 4	四角 四角	490	490	480	500	N-14°-E 10.0 ↓ 23.0	北	4	鬼高前葉	覆土内遺群	

遺物

1) 縄文時代

井上遺跡から出土した縄文時代の土器は、全てグリッドからの出土で、遺構にともなわなかった事と、全体に小破片であったため、文様構成および器形は全体を知りうる事が困難であった。よって、時期決定は慎重な検討が必要とされ、先学の研究成果や他地区での出土資料との比較検討を詳細に行なう等、積極的な方法を試みたが、全体的に縄文早期末～縄文前期初頭にかけての出土例は僅かであり、十分な考察には至らず、なお今後の課題とした。

先ず尖底土器であるが、尖底部位の残存部に僅かに羽状縄文の文様が認められ、他の出土土器片で、含織維土器の羽状縄文および斜縄文土器と胎土、作り方等が類似しており、なお茅野市下ノ原遺跡から出土した尖底深鉢とも様相を同じくして、東海地方の薄手である無文土器様式の

影響で平底への転換のおくれが井上遺跡においても認められよう(1)。そして、他の土器片ともに関東地方の花積下層式系に比定されるであろうと思われる。大岡村鍋久保遺跡(1976森嶋・笹沢)、下諏訪武居林遺跡、同一ノ釜遺跡(1979中村)で、この種の土器片が発見されている。ただし、条痕文系土器、G(13. 27. 36)は、尚検討を要する。

また、縄文後期初頭の土器はすべて堀の内式に属するものである。

本遺跡から出土した縄文前期初頭の土器は、佐久平におけるはじめての資料であるため、今後地域的研究の貴重な資料となるであろう。

(由井 茂也・島田 恵子)

註1 小林達夫 日本原始美術大系「縄文土器」講談社

2) 弥生時代

本遺跡から出土した弥生土器は、いずれも破片であり、住居址等の生活址からの出土でないため個々の形態、セット関係、時間関係を考察することはできないが、特に壺形土器、甕形土器、坏形土器の文様構成にその特徴がみられる。

壺形土器の頸部に施される文様は、櫛描波状文によるものとへら描沈線文によるものとがみられ、口辺部に波状文を施文することもある。後期に一般的にみられる櫛描横線文ないし横線文を垂下させたいわゆるT字文はなく、また、赤色塗彩の傾向もない。

甕形土器は、口縁端部装飾として刻み目を用いていることと、体部には櫛描直線文を多用する傾向が強い。

坏形土器は、赤色塗彩されるものの、口辺部に櫛描波状文を施している。

これら文様構成上の特徴は、千曲川水系の弥生後期の土器型式である箱清水式と比較したからに他ならないが、井上遺跡出土の弥生土器は、総じてブレ箱清水的と言えよう。特にその様相は、吉田式土器に類似する点が多い。後期初頭に位置付けられる資料が、佐久平でこれだけまとまって出土した例はなく、今後、地域の土器編年を確立していくうえでの貴重な手がかりとなるだろう。

(由井 茂也・白田 武正)

3) 古墳時代

器形はバラエティーであり、甕形土器、甕形土器、坏形土器、碗形土器、高坏形土器、のほか少数の手捏土器、埴形土器が出土した。

甕形土器は、大・小形があり、大形のは把手をもつH2号住居址の4と、もたないものがある。小形のは、いわゆる逆「ハ」の字状を呈し、H2号住居址とH4号住居址より出土している。2点とも口径が底径の4径近くある。これらはすべて一孔である。

甕形土器はやはり大・小形がある。大形はH3号住居址の1とH2号住居址の1があり、H3号住居址のものは、いわゆる長胴を呈す、長胴ではあるが胴部は若干丸みをおびている。H2号住居址のものは口辺部が「く」の字状に外反し、胴部は丸みを強くもつものと思われ口径からも甕形土

器の可能性もある。いずれも最大径は胴部にある。

環形土器と椀形土器は、従来明確な判別がなされておらず、ここでは一応口径が器高の2倍以上のものを環形土器、2倍以下のものを椀形土器と機械的に分類する。

環形土器は、外稜を有すものが皆無であり、内面異色研磨土器も少く1点のみである。素縁口辺のものは、H 2号住居址の7、H 3号住居址の4、H 4号住居址の8、9、10、11の6点がある。口辺部が短く外反し内稜をもつものは、H 4号住居址の6、7がある。いずれも内面丁寧にヘラミガキされている。前者は鬼高期全般にみられるもので時期等により器高に変化がある。後者は前時期の伝統を残すものとおもわれる。

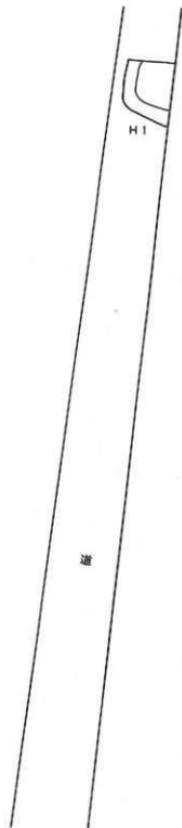
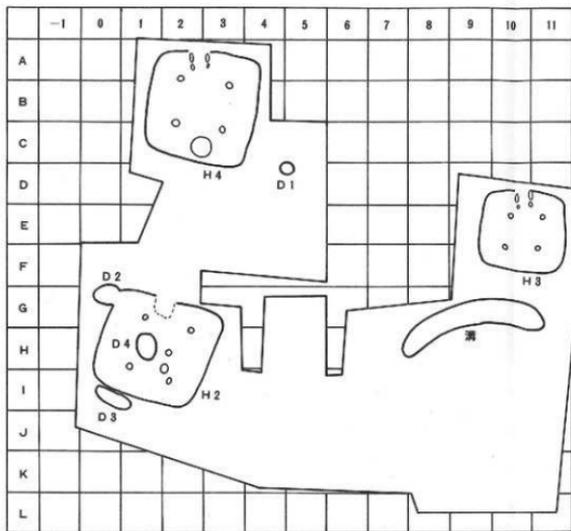
椀形土器は、口辺部下が強くくびれるH 2号住居址の8、口辺部下のくびれが弱く内稜を有するものH 1号住居址2、3、H 2号住居址2、H 4号住居址2、と、口辺部下のくびれが弱く内稜のないものH 4号住居址の5がある。いずれも市道遺跡出土の椀形土器B類(1976年「市道遺跡 IV市道遺跡出土の土師器について」 今井正晴 村山好文)に類似するものである。

高環形土器は2点ありH 3号住居址の8は、脚部がエンタシス状にふくらみわゆる円筒形を呈し、杯部と脚部共に丁寧なヘラミガキで仕上げられており和泉期の様相をうかがわせてはいる。

以上主だった器種の特徴をみてきたが詳細は、住居址別に表に一覧してある。H 1号住居址ほか3軒の住居址出土の土師器は、H 2号住居址、H 3号住居址の椀形土器、H 3号住居址、H 4号住居址の高環形土器等の特徴を合せ考えると鬼高期前葉にその時期を位置づけられよう。H 1号住居址は、プラン全貌が明らかでないが、他の住居址に比して若干古い様相もおびているのではなかろうか。

本遺跡出土の資料を加えることによって、佐久地方の鬼高期の土器様相も細分化され、より細かな編年が可能で段階に入ったといえよう。

(由井茂也・林 幸彦)



第32回 井上遺跡遺構全体図 (1:200)





1 井上遺跡遠景（東方より）



2 北方に浅間山を望む遺跡の立地



6-1



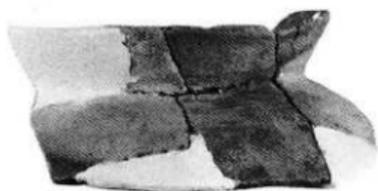
6-2



6-3



H1 号住居址の出土遺物及土器、炭化物の出土状態



8-1



8-6



8-4



8-7



8-8

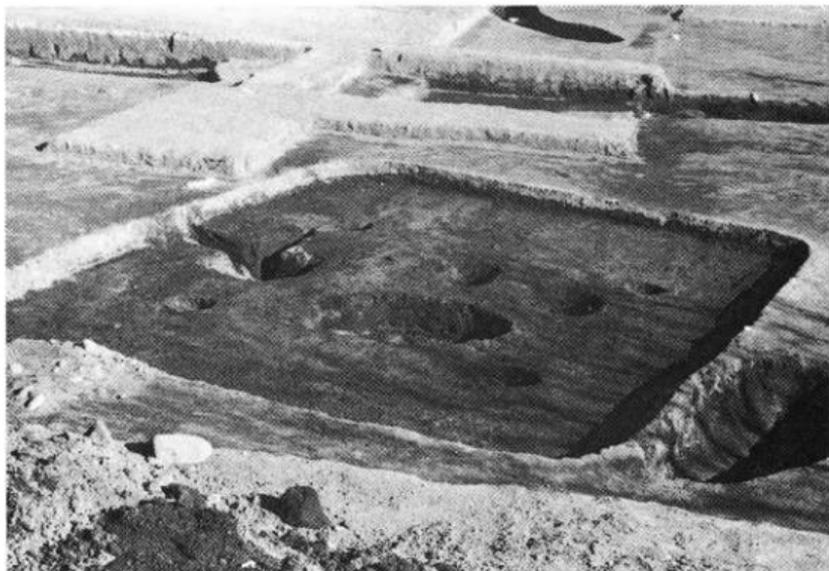


8-5



8-9

H 2号住居址の出土遺物



1 H 2号住居址



2 H 3号住居址炭化材の出土状況



12-1



12-3



12-4



12-5



12-6

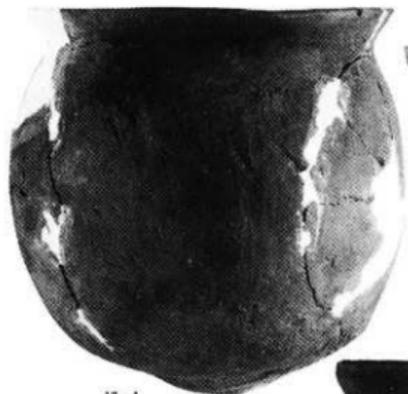
H 3 号住居址の出土遺物



1 H 3号住居址の出土遺物



2 H 3号住居址カマド



17-1



17-5



17-2



17-3



17-4



17-6



17-7

H 4号住居址の出土遺物



17-8



17-9



18-12



18-10

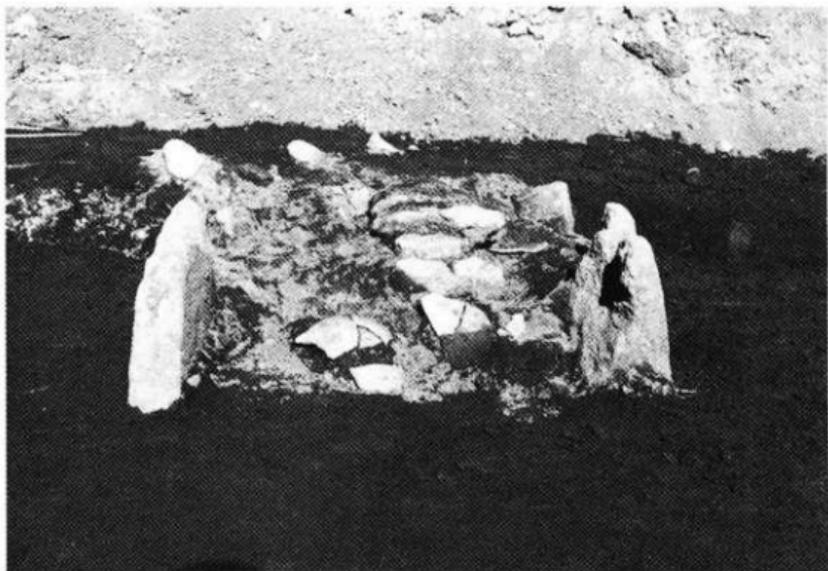


18-11

1 H 4号住居址の出土遺物



2 H 4号址



1 H4号住居址カマド



2 M1号溝状遺構



1 D 2号土壇



2 D 3号土壇

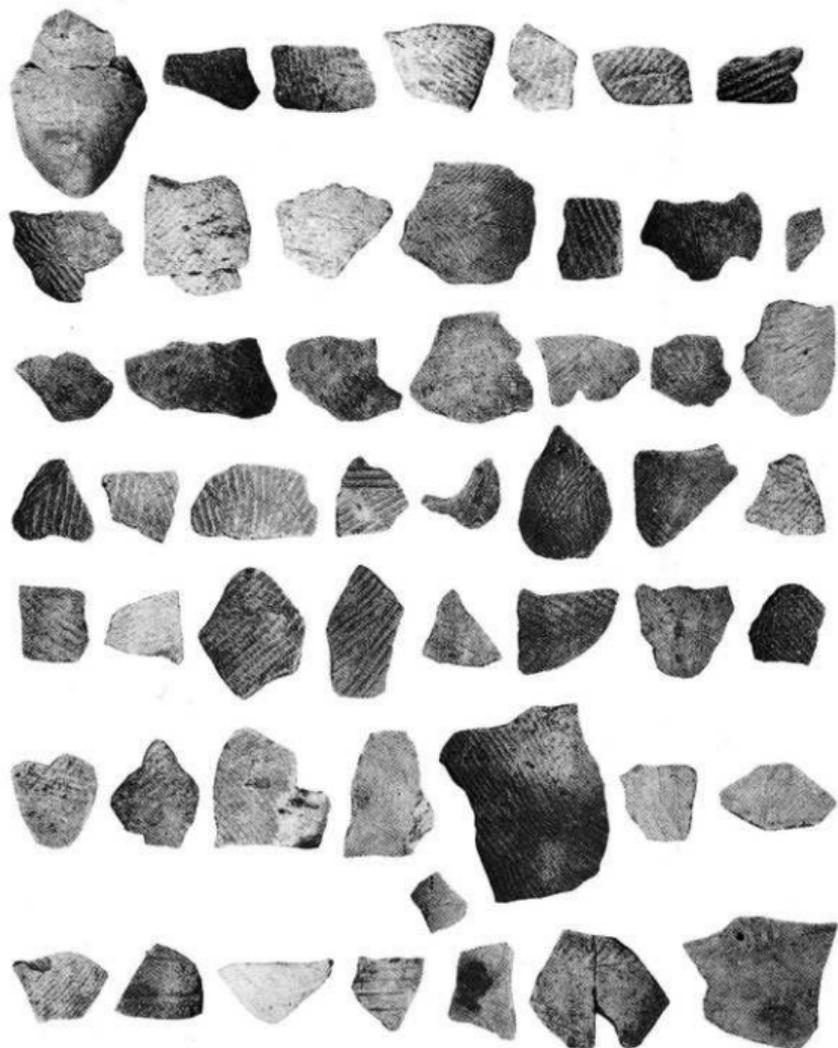


3 D 4号土壇

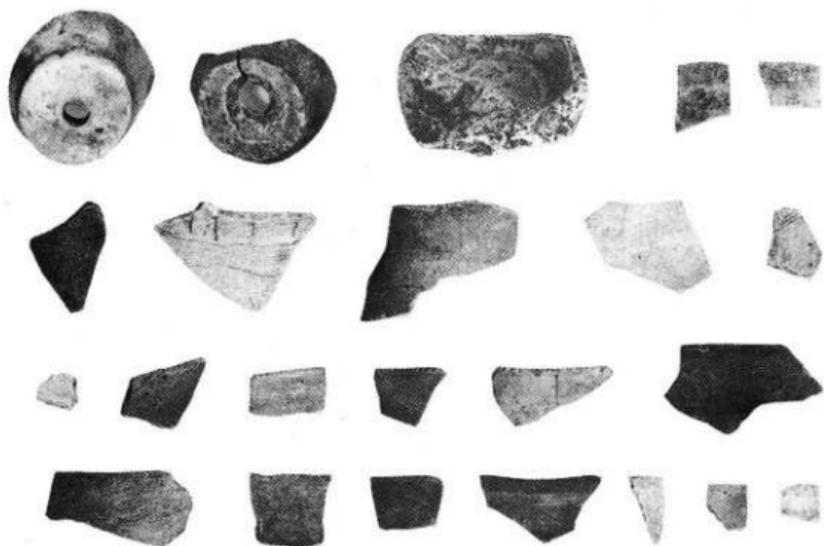


21-1

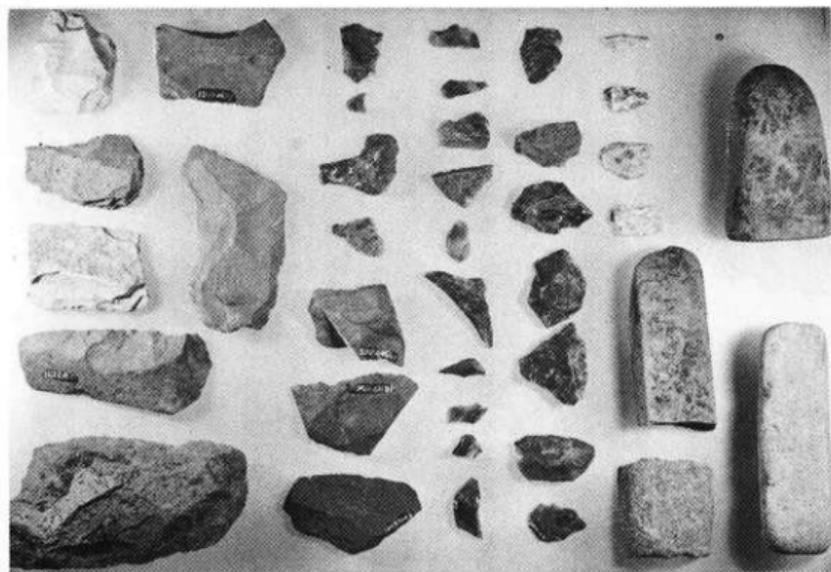
4 D 4号土壇の出土遺物



1 縄文前期初頭・後期初頭の土器



1 弥生時代の土器 (標の圧痕上段中央)



2 石器



1 井上遺跡発掘調査スナップ



2 井上遺跡発掘調査スナップ

井 上 遺 跡

長野県白田町緊急発掘調査報告書

発行日 昭和55年1月

発行者 長野県南佐久郡白田町

白田町教育委員会

編集 佐久考古学会

印刷所 佐久印刷